新制中等新國文 卷四

375.9
Mi20
資料室

41763
教科書文庫
4
810
41-1938
20009
26463

文部省檢定濟

教科書　中學校國語漢文科　實業學校國語科

昭和十三年二月十五日

新制中等新國文

編纂者　文學博士　三矢重松

補訂者　國學院大學教授　御歌所寄人　鳥野幸次

補訂者　文學博士　折口信夫

株式會社

文學社

資料室

3759
M720

第六

遠藤昌

六年生

遠藤昌

編纂者文學博士　三矢重松

補訂者文學博士　折口信夫

廣島大學圖書
廣島大學教
26463
圖書

例言

一　本讀本は、國語教育が擔へる重大なる使命に鑑み、國家的精神の昂揚と、民族の自覺の上に、大いに裨益せんとするを以て、教材選擇の主眼とす。

一　本讀本は、現代文を中心とし、各時代の各種の文體に亙りてその代表的作品を網羅し、學年の程度に應じて配列を鹽梅し、以て國語常識涵養の徹底を期す。

目次（巻四）

一　明倫の歌……四
二　哲人聖德太子……高島米峰……九
三　正倉院……藤代禎輔……一五
四　膽力の養成……嘉納治五郎……二三
五　氷川清話……勝海舟……二九
六　古名將の嗜み……湯淺常山……三五
七　古城……大類伸……四三
八　松と大和心……池邊義象……四八
九　心の置處……山本有三……五三
一〇　夜叉王……岡本綺堂……五九
一一　翼……吉江喬松……六〇
一二　鳥の生活と談叢……藤澤衛彦……六六

一三　小園の記……正岡子規……八三
一四　草と蟲……若山牧水……九二
一五　短詩二章……西條八十・三木露風……九七
一六　アルプの秋……槇有恒……一〇〇
一七　碓氷だより……德富蘆花……一〇九
一八　スキー禮讚……木原均……一二五
一九　我が年中行事の自然味……上原敬二……一三二
二〇　雪國の春……柳田國男……一三二
二一　伊能忠敬……幸田露伴……一四一
二二　かんにん……柳澤淇園……一四八
二三　己をかへり見よ……柴田鳩翁……一五一
二四　月雪花……芳賀矢一……一五五
二五　文章の道……島崎藤村……一六四
附錄　字音假名遣一覽

一　明倫の歌

君　臣

世治まり民安かれといのるこそ
我が身に盡きぬおもひなりけれ

後醍醐天皇

すべらぎの神のみことを受け來つゝ
いやつぎ〳〵に世をおもふかな

龜山天皇

讀人不知

後醍醐天皇　後宇多天皇の第二皇子。第九十六代の天皇。延元四年（一九九九）崩御、寶算五十二。

龜山天皇　後嵯峨天皇の第三皇子。第九十代の天皇。嘉元三年（一九六五）崩御、寶算五十七。

廣島大學圖書之印

つくばねのこのもかのもに蔭はあれど
君がみかげにますかげはなし

源實朝

山は裂け海はあせなむ世なりとも
きみにふたごころわがあらめやも

國體

藤原良經

わが國は天照る神のすゑなれば
日の本としもいふにぞありける

小澤蘆庵

源實朝　頼朝の第二子。征夷大將軍。右大臣。藤原定家に學び和歌に秀でた。承久元年（一八七九）薨、年二十八。

藤原良經　關白兼實の子。攝政太政大臣。鎌倉時代の歌人。建永元年（一八六六）薨、年三十八。

小澤蘆庵　名は玄中。尾張

おろかにも千代萬代といのるかな
こゝはとこ世のやまとしまねを

文　教　　後龜山天皇

集めては國のひかりとなりやせむ
わが窓てらすよるのほたるび

本居大平

遠つ國知らぬさかひの言の葉も
書みる道にゆきかよふなり

本居宣長

の人。京都に住す。冷泉爲村に學び歌人として有名。享和元年（二四六一）歿、年七十九。

後龜山天皇　第九十九代の天皇。後村上天皇の第二皇子。御位を後小松天皇に讓り給ひ、應永三十一年（二〇八四）崩御。寶算七十五。

本居大平　伊勢國松坂の人。宣長の門に入り、その養子となる。宣長の學問を守成した人。天保四年（二四九三）歿、年七十八。

本居宣長　鈴廼舍と號す。

をり〳〵に遊ぶいとまはある人の
いとまなしとてふみよまぬかな

荷田春滿

ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥の
あとを見るのみ人のみちかは

武　德　　源實朝

物部の矢並つくろふ籠手の上に
あられたばしる那須のしのはら

藤原定家

伊勢國松坂の人。賀茂眞淵の門。國學四大人の一、享和元年（二四六一）歿、年七十二。

荷田春滿　羽倉氏。京都稻荷山神社の祠官。國學四大人の一。元文元年（二三九六）歿、年六十八。

源實朝　前出。

藤原定家　俊成の子。新古

五重塔（法隆寺）

百敷や照る日の前にとる矛の
たつる心は神も知るらむ

太田持資

かゝる時さこそいのちの惜しからめ
かねて亡き身とおもひ知らずば

橘千蔭

千よろづの仇にむかひて走り猪の
かへりみせぬをこゝろともがな

―（明倫歌集）―

太田持資　剃髪して道灌といふ。足利時代の武將。江戸城の創始者。文明十八年（一四八六）歿、年五十五。

橘千蔭　加藤氏。芳宜園と號す。江戸の人。賀茂眞淵門下の歌人。文化五年（一八〇八）歿、年七十四。

今和歌集、新勅撰和歌集の撰者。仁治二年（一二四一）歿、年八十。

二　哲人聖德太子

高島米峰

私の最も崇敬する哲人を過去に求めて、私はまづ聖德太子を擧げざるを得ない。聖德太子の偉德鴻業は山の如く高く、海の如く廣く、到底筆紙のよく盡くすところでない。憲法十七條を定めて平和の理想を宣言し、この理想實現の爲には、佛教の信仰を以て國民の精神生活の根本基調とすることの切要なのを認め、更にこれに依つて、天皇中心主義を闡明して、建國の精神を振作し、また冠位十二階を定めて人材登用の門を開き、以て閥族跳梁の弊を一掃して、內政を充實し給うたので、日本の面目はこゝに全く一變するに至つたのである。これが爲に當時世界の最大强國として、最も文化

高島米峰　明治八年新潟縣に生る。宗教家。評論家。

聖德太子　御名は厩戸皇子。用明天皇の第一皇子。推古天皇の二十九年（一二八一）薨、御年四十九。

の進歩した支那――支那は恐らく日本をその屬國ぐらゐにしか考へてゐなかつたであらう。それ程に日本の世界的地位は低いものであつた。――と對等の國交を結ぶことになつたといふのは、實に聖德太子の偉大なる功業である。

聖德太子は推古天皇の十五年に、遣隋使發遣のことを決定し給ひ、小野妹子が使節に任ぜられて、その年七月に出發した。この年は隋の煬帝の大業三年で、妹子が煬帝に差出した國書の冒頭には、

日出づる處の天子、書を日沒する處の天子に致す、恙なしや。

とあつて、實に堂々たるものであつた。從來支那は自ら中國を以て任じ、東夷・南蠻・西戎・北狄と、四方の國々を野蠻國あつ

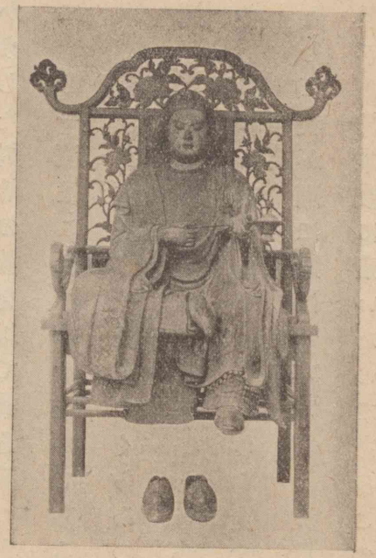
推古天皇　第三十三代の天皇。欽明天皇の皇女。太子はその甥にましまし、皇太子として攝政の任に當りたまへり。

隋　五胡十六國の分裂紛亂を收拾して天下を統一せるものを隋の文帝となす。その子煬帝（ヨウダイ）性豪華を好み、盛に土木を興し、大運河を經營し、又頻りに外征の師を興して國威を輝かせしも、朝鮮の役に破れて國内動搖し、遂に江都に弑せらる。隋は三代三十七年にして亡ぶ。

小野妹子　天偉彥國押人命六世の孫、米餅搗大使主命の後。遣隋使たること二回、歸朝後、位大德冠に至る。歿年不詳。

かひにしてゐたので、日本の如きも所謂東夷の中の一つぐらゐに考へてゐたのであらうが、その日本から、突如としてかうした對等の禮を以て書を贈つたので、煬帝は甚だ不快に感じ、一度はこれを却けたのである。が、しかし、これほどの國書を差出す國は、一體どのくらゐの文化をもち、國民の生活がどのくらゐ進んでゐるか、ともかくもその實情を知る必要があると思つたのであらう、斐世清といふものを使者として我が國に遣はす事となり、斐世清は小野妹子と共に、翌年四月難波に着いたのである。この隋使斐世清の報告が、日本と隋と對等なものにするか、それとも依然として屬國あつかひにするかといふ最も重要なものであつたので、聖德太子はその待遇については、頗る心をお籠めになつたら

しい。まづ朝庭では飾船三十艘を以て一行を難波の江口に迎へ、難波の新館をその旅館に充てて、優遇至らざるなく、また彼が都に入る時には、飾騎七十五疋を以てこれを大和の海石榴市の衢に迎へさせた。天皇の謁を賜うた時には、有司百官が、定められた冠位に隨つて、綺羅星の如く宮庭に居並んだといふので、さすがの斐世清もすつかり感服してしまつたらしい。その結果、彼が歸國の時、第二回遣隋使として再び小野妹子を遣すこととなつ



海石榴市　大和國磯城郡三輪町。當時は繁華の市なりき。

挿繪　聖德太子御像（國寶）

第二回遣隋使　同年九月。

た。その時妹子の持つて行つた國書は、やはり聖德太子の筆に成つたもので、實に大文章であつた。さすがの隋の煬帝も、斐世清の報告やら、かうした堂々たる二度の國書やらで、もう否應なしに、對等な國交を結ばなければならないことになつて、支那は日本を完全な獨立國として認めたのである。これ實に聖德太子の理想の一面が遺憾なく實現したのであつて、我が國の金甌無缺の國體を維持せられたのも、これらに淵源す

挿繪　法隆寺全景。

るところが頗る多いのである。

聖德太子の御事業は、右に述べた外、外國文明の輸入でも、美術工藝の奬勵でも、歷史の編纂でも、憲法の創制でも、冠位の制定でも、曆法の研究でも、何一つとして偉大でないものはないが、その中でも最も重要なものは即ち天皇中心主義の徹底、最も意義あるものは即ち佛教の興隆、最も華やかなものは即ち日隋對等の國交であつて、これ私が哲人として崇敬し讃嘆し奉る所以なのである。

三　正倉院

藤代禎輔

秋十月、正倉院の御蟲干で、御物の拜觀が出來ると聞いて出掛けた。京都からなら、日歸りで樂に行けるのであるが、少し外にも見物したい所もあるので、前日から行つて一晩泊ることにした。

夜、奈良の町を歩いて見ると、至極靜かで、對山樓から興福寺を拔けて、猿澤の池へ出るまで、人一人にも出遇はぬ。鹿の聲が聞えるかと耳を澄まして居たが、どうした譯か毫も聞えなかつた。翌朝五時半に起出て、春日の森を散歩した。すると、今朝は鹿の聲が彼方此方でうるさい程聞えた。春日神社は修繕中で中に這入れないから、玉垣の外から遙拜し、手向

藤代禎輔　文學博士。千葉縣の人。昭和二年歿、年六十一。

正倉院　木造の倉庫。大佛殿の北にあり。聖武天皇の御遺物を始め、貴重の物品を藏む。御蟲干は現在は多く十一月に行はる。

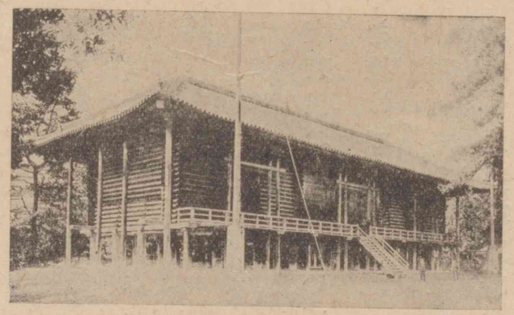
興福寺　法相宗の本山。奈良市公園の地内にあり。

猿澤の池　興福寺の南崖下にあり。

春日神社　官幣大社。奈良市春日野町にあり。

手向山八幡宮　東大寺の鎭守神として建てられしものにて、同寺の東約五五〇米に在り。

山八幡宮・三月堂・二月堂・鐘樓・大佛殿と順次に見物して、一先づ旅宿に歸り、朝餉を濟ませてから正倉院に出向いた。



平城舊都一條大路に當る轉害門、又の名景清門を拔けて、大佛供養の時、惡七兵衞景清が此の門に潛んで將軍賴朝を討たうとしたといふ傳說を思ひ出し、間もなく正倉院に著いて控室に上ると、雷名四海に轟く某將軍が來て居られる。博物館長の紹介で、將軍に名のりを揚げる。嗚呼、今日は如何なる吉日ぞ。此の世界的偉人と御近附になり、驥尾に附して御物を拜觀する榮を得

三月堂　東大寺所屬の堂。羂索院又は法華堂等と呼ぶ。

二月堂　三月堂の背後にあり。

鐘樓　東大寺の鐘樓。

大佛殿　東大寺の本堂。本尊の大佛（盧舍那佛）を安置す。

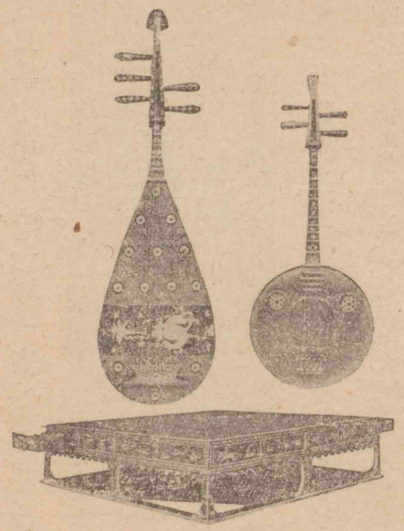
轉害門　一に碾磑門に作る。東大寺の北西隅の門。建久年間に大佛供養に際し、平景清この門に隱れて源賴朝を窺ひしといふ。近松門左衞門の「出世景清」はこの傳說を綴れるものなり。

挿繪　正倉院校倉。

某將軍　陸軍大將乃木希典。

驥尾に附す　王字淵の四子講德論に、「夫蚊蝱、終日經營、不能越二階序一、附二驥尾一則涉二千里一、攀二鴻翮一則翔二四海一。」

た。頓て係官の先導で拜觀を始めた。先づ立派に螺鈿の裝飾を施した琵琶・阮咸等の樂器を見て、細工の精巧に一驚を喫し、聖武天皇の御使用の仕込杖と聽いて、千二百年以前既に此の工夫があり、而も現今の物に優るとも劣るまじき裝置に再驚を喫した。將軍は此の仕込杖に深き興味を寄せられ、石突の工合に注意し、刀身の諸刃なるか、片刃なるかを確め、銘の有無、目貫の孔の數を質し、柄に鮫皮が用ゐてあると聽き、當時の工藝



螺鈿　貝や金銀等を器物の表面に嵌めて飾としたるもの。

阮咸　樂器の一種。秦の琵琶なりといふ。

挿繪　阮咸（右）・琵琶（左）・蒔繪の棊盤（下）。

石突　杖の地を突く端。多くはこゝに金具・角などを嵌む。

の進歩に驚かれる樣であつた。それから蒔繪の碁盤、硬玉及び赤珊瑚の碁石、鳥毛屏風の下繪等、いづれ目を驚かさぬ物は無いが、取分け金銀珠玉を鏤めた鏡類の燦爛目を奪ふ立派さ、見事さ、中にも一面七寶の裝飾を加へた鏡は、外國人が垂涎を禁ずる能はざる世界の逸品であるさうだ。

聖武天皇の御寢臺は、長さと云ひ、幅と云ひ、實に大きなものであるが、將軍は委しく其の寸法を測つて居られた。中倉の二階であつたか、刀劍・弓矢・槍戟の類が澤山ある。これは惠美押勝の亂に用ゐられたものであるとか云ふ。普通の觀覽者は一通り目を通した

鳥毛屏風　鳥毛を張りて飾としたる故の名。

七寶　金・銀・瑠璃・玻璃・珊瑚・瑪瑙・硨磲の總稱。

挿繪　鳥毛屏風の下繪。

惠美押勝　藤原仲麿のこと。武智麿の第二子。孝謙天皇の殊寵を受け、從二位中衞大將となる。淳仁天

だけで、さつさと過ぎ去つて仕舞ふのであるが、將軍は職掌がら特に綿密な注意を拂はれた。先づ長槍の柄の卷方、石突の工合を仔細に點檢され、刀劍類の細部を逐一取調べて、「後世今日に至るまでの種類は、天平時代に一も缺けて居ない。」と語られて、それから弓矢に就いては、「矢の羽根は二枚か。」と問はれ、「二枚のも、其の他如何なる種類のもあり、鏑矢までも備つてゐる。」と係官は答へる。矢の根もすべての種類があるかと聽いて、「雁股の矢の根があるか、雁股ならば四枚羽の筈なり。」と問はれ、係官は何れも然る旨を答へた。聽手も聽手なら答手も答手で、此の故實上の問答は、實に意外の聽物で、傍聽の我々どもは思はぬ新知識を授けられたのである。將軍の用意周到なることは、專門の武具・馬具に限らず、何事に懸

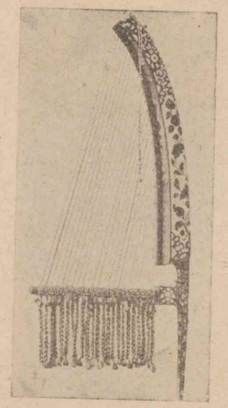
皇の御代には正一位大師（太政大臣）となりしが、たま〳〵僧道鏡が孝謙上皇に寵遇せらるゝを嫉み、これを除かんとして、一四二四年兵を擧げ、事成らずして官軍の爲に斬らる。年五十九

天平時代　聖武・孝謙・淳仁・稱德の四天皇の御代に天平二十年、天平感寶一年、天平勝寶八年、天平寶字八年、天平神護二年あり。この間に佛教興隆し、美術工藝著しく進歩せり。この時代を總稱して天平時代といふ。

鏑矢　鏃（ヤジリ）の一種。その形が燕（カブラ）に似たるより名づく。

雁股　鏃の一種。鏑の先にさすもの。

けても非凡であつて、錠前の種類、唐櫃の蓋の厚みに至るまで目を留められ、經筒の構造に至るまで細密な觀察を遂げ、其の質問の細かいこと、並大抵の係官では答辯に困るだらうと思はれる位。我々の先導者は、八年以上此の御蟲干のため、東京から年々出張すると云ふ老練家であるから、如何なる質問に逢つても淀みなく答へるので、聽いて居ても心持が好かつた。



次に箜篌と云ふ樂器は、西洋の竪琴に似たものであると、かねて聞いて居たから、特別の興味を以て迎へたのであるが、何樣餘程珍らしいもので、支那人が此の箜篌や阮咸を見

挿繪　箜篌。

箜篌　竪琴の一種。もと支那の樂器。

て、これらの樂器は書物の上で見るばかり、實物を見るのは今が初だと云つて感歎するさうである。此の外、東羅馬帝國の遺物と云はれる玉・水晶乃至玻璃の器具や、唐櫃の外部にある密陀繪の如きは、これまた全世界に類の無い逸品ださうで、西洋の博物館に此の類があつても、いづれも土中から發掘した品であるから、見る影もなく破損されて居るが、正倉院の御物は之を一つ取出して見せられたら、迚も千年以上の星霜を經たものとは思はれぬほど鮮かで、艶やかな品である。最も不思議に思はれるのは、矢竹や、筆の軸に毫も蟲喰の跡がなく、料紙も天平時代の物が、今新しく漉上げたばかりと思はれる有樣に、保存せられて居ることである。これは奈良の土地が乾燥してゐるのと、校倉（あぜくら）の構造が宜しいの

密陀繪　密陀僧（酸化鉛）にて描きたる繪。

校倉　古代の木造の倉庫。三角形の木材を井字形に積重ねたるもの。

と、手入の行屆く爲であるには相違ないが、一時は隨分投遣りにせられて、乞食が緣の下で焚火をしたと云ふ噂もあるし、落雷の痕も歷々と存して居る所を見ると、實に一の奇蹟である。是も偏に世界に無比な萬世一系の我が皇室の御稜威の彌高きを示すものであつて、是こそ我々が宇内に向つて誇り得る一大寶庫である。

—(文藝と人生)—

菊の香や奈良には古き佛達　芭蕉

奈良七重七堂伽藍八重櫻　同

芭蕉　松尾氏。名は宗房。俳人。元祿七年歿、年五十一。(一六四四—一六九四)

四　膽力の養成

嘉納治五郎

大丈夫と生まれたからには、死生の境に出入して、從容自若として事に當り、天下の大事を談笑の間に決するだけの膽力を有ちたいものである。膽力のあるものは、白刃眼前に閃き來り、危巖頭上に崩れかゝるとも、悠然として身を持することが出來るが、膽力のないものは、天井から鼠の糞が一つ落ちても、膽を冷し色を失ふではないか。

膽力は、その人の天稟にもよるが、また決して修養し得られぬものではない。上杉謙信が、十四五歳の時大敵に追はれて門番所の板敷の下に潛伏しながら安眠して居つたとか、德川光圀が、六歳の時暗夜に刑場に往つて死人の首を持ち

嘉納治五郎　兵庫縣の人。柔道家。教育家。東京高等師範學校名譽教授。貴族院議員。昭和十三年歿、年七十九。

上杉謙信　名は輝虎。天正六年(一五七八)歿、年四十九。

德川光圀　水戸藩第二代の主。

歸つたとか、ネルソンが、幼時から恐怖の何ものたるかを知らなかつたとかいふ如きは、皆天稟と見るべきものであるが、修養によつて剛膽の人となつた例も亦決して稀でない。

昔、武田信玄の部下に、岩間大藏左衞門といふ武士があつた。その容貌は魁偉で、一見したところ儼然たる大丈夫であつたが、その性質は至つて卑怯であつた。信玄は、どうかしてこれを矯正しようと考へて、或日の戰に、彼を掩護物のない處に縛りつけ、敵に向つて坐らせて、一歩も身動きの出來ないやうにして置いた。矢玉は雨のやうに飛んで來る、砲聲は雷の如くに轟く。彼はその怖しさに、殆ど死人のやうになつてしまつた。併しその戰爭のしまひまで、幸にも一つも矢玉が中らなかつた。そこで、彼は飜然として、運さへあれば、矢玉

ネルソン　英國海軍の名將。トラファルガー沖に佛國艦隊を破る。西紀一八〇五年歿、年四十八。

武田信玄　名は晴信。天正元年（一二三三）歿、年五十三。

でも中らない、死は決して畏るべきものでないと悟つて、それからは、戰爭ごとに勇み立つて前進し、遂に武名を揚げたといふことである。

大藏左衞門が戰をおそれたのは、彈丸雨飛の危險を過大視したからである。これは戰爭のみならず、多くの場合によく有ることで、危險災害の身に迫つた時、直にその結果を過大に豫想して恐懼狼狽するのは、神經質な人ほど有り勝ちのことである。ところが、平素修養あり經驗ある者は、決して恐懼狼狽することはない。消防夫が炎々と燃えあがる猛火の中に泰然として立つのも、水夫が狂瀾怒濤の間に自由に働くのも、皆鍛錬と經驗とに依つて得た自信と覺悟とがあるからである。だから、成る可く多くの鍛錬と經驗とを積む

ことは、膽力養成の有力な方法である。

次には、あきらめるといふことが必要である。危險災害などの來る場合に於て、成るべく安全にこれを避けようとするのは、人の眞情には相違ないが、それが爲に却つて怯懦に陷ることがあるものである。最も惡い結果を身に引き受けても、是非に及ばぬといふ覺悟を極めれば、膽は自然に据わるものである。例へば眞劍勝負をする場合に、先づ身を捨てる覺悟を極め、吾が骨を切らせて敵の命を奪はうといふ風に、死身になつた上で手段と伎倆とを盡くす方が、命を惜しむ者よりは自由が利くから、自然と數倍の働きをすることが出來る。

勝海舟は膽力に富んだ人で、白刃を踏みつゝ談笑の間に

勝海舟　名は安芳（ヤスヨシ）。舊幕臣。海軍卿。樞密顧問官。伯爵。明治三十二年歿、年七十七。

天下の大事を決した英傑であるが、自らその膽力を、禪學と劍術とに依つて養成したものと信じ、左の如く語つてゐる。

「自分は殆ど四箇年の間、禪學と劍術とを修業したが、德川幕府瓦解の時分、萬死の境に出入して、終に一命を全うしたのは、全くこの二つの功であつた。度々刺客なんかに脅されたが、何時も手取りにした。この勇氣と膽力とは、畢竟この二つに養はれたのだ。危險に際會して逃げられぬ場合と見たら、先づ身命を捨ててかゝつた。さうして、不思議に一度も死ななかつた。こゝに精神上の一大作用が存するのだ。急に勝たうとすると、忽ち頭熱し胸跳り、措置顚倒し、進退度を失するやうな患が生じて來る。若し又遁れて防禦の位置に立たうとすると、忽ち畏縮の氣が生じて、相手に乘ぜられる。事大

小となく、皆この規則に支配せられるのだ。自分は、この精神上の作用を悟了して、何時も先づ勝敗の念を度外に置いて、虚心坦懷を以て事變に處した。それで、小にしては刺客・亂暴人の厄を免れ、大にしては瓦解前後の難局に處して綽々として餘裕あることを得たのだ。」と。

海舟は主として劍術と禪學とで膽力を錬磨したのである。理窟の上から膽力を養成することは容易でないが、實地の修業に於て膽力が錬磨せられることは、殆ど人の意料以上である。

—(青年修養訓)—

五 氷川清話

勝海舟

世に處するには、どんな難事に出會つても臆してはいけぬ。「さあ、何でも來い。おれの體がねぢれるなら、ねぢつて見よ。」といふ料簡で行くがよい。さうすれば、難事が到來すればするほど面白みがついて來て、物事は造作もなく落着してしまふものだ。何でも大膽にかゝらなければいかぬ。どうしようか、かうしようかと躊躇するやうになつてはもういかぬ。若し一度で出來なければ、何度でも出來るまでやり通す。兎角世間の人は、事業の成就する前に、はや根氣が盡きて疲れてしまふから、大事が出來ぬのだ。確乎たる方針を立て決然たる自信によつて、知己を千載の下に求むる覺悟で進んで

勝海舟 四課註參照。

行けば、何時しか赤心の貫徹する時機が來て、これまで敵視して居た人の中にも互に肝膽を吐露しあふほどの知己が出來るものだ。區々たる世間の毀譽褒貶を氣にするやうでは到底仕方がない。そこに行くと、西郷南洲などはどれ程大きかつたか分らぬ。高輪の一談判で自分の意見を容れたばかりでなく、江戸全市鎭撫の大任まで一切自分に任せて少しも疑はぬ。昨日まで敵味方であつたといふことは何處へか忘れてしまつたやうだ。其の度胸の大きいことは自分もほと〳〵感心した。

西郷南洲　名は隆盛。明治維新の元勳。前參議。陸軍大將。明治十年歿、年五十一。

挿繪　勝海舟肖像。

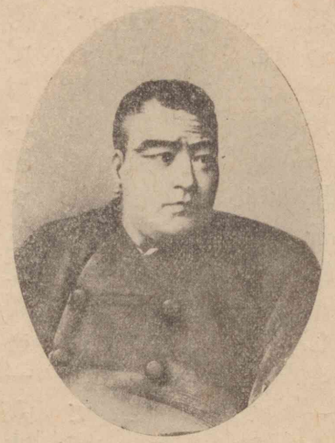
高輪　東京市芝區高輪にありし薩摩屋敷を指す。

官軍が品川まで押し寄せて來て、いまにも江戸城へ攻め入らうとする際に、西郷は自分が出した唯一本の手紙で、芝、田町薩摩屋敷までその談判にやつて來た。當日、自分は羽織袴で馬に騎つて、從者を一人連れたのみで出掛けた。まづ一室へ案内されて暫く待つて居ると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を從へ、平氣な顏で出て來た。

「これは遲刻しまして誠に失禮。」と挨拶をしながら座敷に通つた。其の樣子は少しも一大事を眼前に控へたものとは思はれなかつた。さて愈談判になると、西郷は自分のいふことを一々信用してくれ、其の間に一點の疑念をも挾まない。「色々むづかしい議論もありませうが、私は一身にかけて御

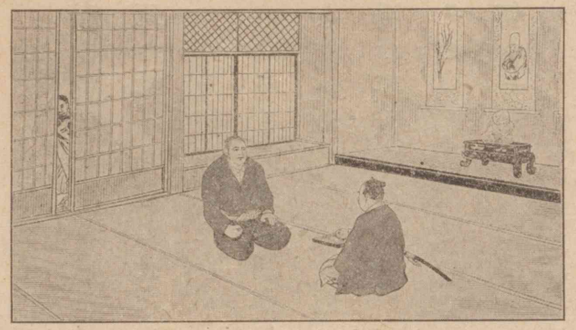
品川　東京市品川區。東海道口。

引受します。」とかういふのだ。西郷のこの一言で江戸百萬の生靈も、その生命と財産とを保つことが出來、德川氏も亦その社稷を保つことを得たのだ。若しこれが他人であつたら、「いや貴樣のいふ事は自家撞着だ。」とか、「言行不一致だ。」とか、「澤山の暴徒があの通り處々に屯集して居るのに、恭順の實が何處にある。」とか、色々喧しく責め立てるに違ひない。さうすると、談判は忽ち破裂だ。併し西郷は流石にそんな野暮はいはない。よく大局を達觀する明と大事に處する斷とをもつてゐた。



挿繪　西郷南洲肖像。

談判がまだ始まらないうちから、桐野などといふ豪傑連は、大勢次の間に來て、竊かに樣子を覗つて居る。薩摩屋敷の近傍には官軍の兵隊がひし〳〵と詰めかけて居る。實に殺氣陰々として、物凄い程であつた。然るに西郷は泰然として、あたりの光景は少しも眼に入らぬものの如く、談判を終へてから、自分を門の外まで見送つた。自分が門を出ると、近傍の街々に屯集して居た兵隊はどつと一時に押寄せて來たが、自分が西郷に送られて立つて居るのを見て、一同恭しく



桐野　名は利秋。鹿兒島の人。西南役の勇將。明治十年、城山に討死す。

挿繪　薩摩屋敷の會見。

捧銃の敬禮を行つた。

此の時、自分が殊に感心したのは、西郷が自分に對して幕府の重臣たるだけの敬禮を失はず、談判の時にも始終座を正して、手を膝の上に載せ、少しも敗軍の將を遇するといふやうな風が見えなかつたことだ。その度量の大きいことはいはゆる天空海濶で、見識ぶるなどいふことは固より少しもなかつた。知識の點に於ては或事柄は自分の方が上で、外國の事情などは却つて自分が話して聞かせた位だつたが、その氣膽の大きいことに至つては、絶倫といふべく、議論も何もあつたものではなかつた。

—（氷川清話）—

六　古名將の嗜み

湯淺常山

太田持資は上杉定政の家老なり。鷹野に出でて雨に逢ひ、百姓の家に入りて、「簑を貸し候へ。」といひしに、若き女、ものは何ともいはずして、山吹の花一枝折つて出しければ、「花をくれよ、といふことにてはなし。」とて、腹立ちて歸りしに、これを聞きし人の、「それは、

七重八重花は咲けども山吹の
　　みのひとつだになきぞ悲しき

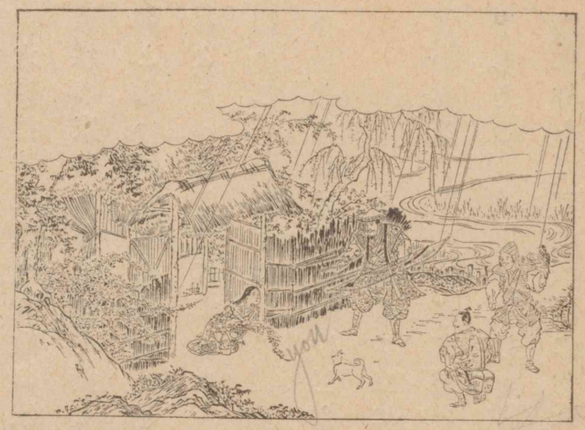
といへる古歌の心にて、簑なしと申すことを、花もて知らせ申したるなり。」と申しければ、持資駭きて、「我これほどのことだに知らで、百姓の娘に劣れること口惜し。」とて、それより書

湯淺常山　名は元禎。岡山藩士。江戸時代中期の儒者。天明元年（一七八一）歿、年七十四。

太田持資　第一課註參照。

七重八重云々　後拾遺集、中務卿兼明親王の作。

簑＝蓑



れは

遠くなり近くなるみの濱千鳥

讀み、歌に志を寄せけり。

或時、下總の國へ軍を出ししに、山涯の海邊を通る時、定政「山の上より石弓を張りたり、潮滿ちたらば通りがたかるべし。いかが。」と、いひし時、折ふし夜半なるに、持資「いざ見て來らん。」と、馬を乘り出しけるが、そのまゝ歸り、「潮は干たり。」とて、軍を押し通しけり。こ

挿繪　山吹の里。

遠くなり云々　冷泉爲守の作。

鳴く音に潮のみちひをぞ知る

と、よめる歌あり。それを思ひ出して千鳥の聲遠く聞えたれば、潮の干たるを知りたりとなり。

また、退き口に利根川を渡す時、最も夜半にて、「暗さは暗し、いづこか淺瀨なるべき。」と、口々にいひけるに、持資、

そこひなき淵やはさわぐ山川の

あさき瀨にこそあだ波は立て

と、よめる歌あり。「波の荒き處を渡せ。」と、下知して、難なく淺瀨を渡りけり。

かくの如く、昔より武將は必ず學問に心を寄せ歌の道を知りけり。

奥州の合戰に、八幡太郎義家、安倍貞任・同宗任を攻めて衣

利根川　關東第一の大河。長さ二八八粁。

そこひなき云々　古今集、素性法師の作。

八幡太郎義家　源頼義の長子。

川の城に追ひつめし時、「きたなくも後を見するや、物いはん。」とて、

衣のたては綻びにけり

と、いひかけしに、貞任鎩を振向けて、

年を經し糸のみだれの苦しさに

と附けたりければ、義家、矧げたる箭をさしはづしけりとぞ。かゝる烈しき折にて、かく附けること優にやさしきことなるべし。

かくて義家上京の後、宇治の關白を訪うて軍物語しけるを、中納言匡房聞きて、「器量は賢けれども、軍の道は知らず。」と、囁きけるを、義家の郎等聞きて、「憎きこと申され候。」と、義家に申ししかば、義家「仔細あるべし。」とて、匡房の中納言、車に乘り

安倍貞任　頼時の子。宗任の兄。
衣川　陸中國（岩手縣）膽澤郡衣川村。
宇治の關白　藤原頼通。道長の子。
匡房　大江氏。學者。天永二年（一七七一）歿、年七十一。

ける所へ參りて、會釋ありて、やがて弟子になりて學問しけり。永保の合戰に、義家金澤の城を攻めし時、一行の雁の苅田の面に下りんとしけるが、俄に驚き亂れけるを、「兵法に、『鳥の起るは伏なり。』と、いふことあり。定めて伏兵あるべし。」とて、野の三方を取り卷きしかば案の如く三百餘の伏兵ゐたりしをせめ破りけり。義家學問に心を寄せずば、などかゝることを知るべき。

右大將源頼朝、和歌に心を寄せ、近き年、武田信玄・上杉謙信兩人とも詩歌を好め

永保の合戰　後三年の役。白河天皇の御代（一七四一―一七四三）。
金澤　羽後國（秋田縣）仙北郡金澤町。
鳥の起るは云々　孫子に云「鳥ノ起ルハ伏也」と。
挿繪　後三年合戰繪卷の一部。

り。蒲生飛驒守氏郷は、伊勢の松が崎十二萬石より、奥州會津百萬石を太閤より拜領し、奥州をきり鎭めたる無雙の猛將なりけれども、極めて和歌を好きけり。氏郷の家に佐々木の鐙といへる名高き鐙ありけるを、細川越中守所望しけるに、家來ども「是は名物にて候。別の似よりたる鐙進ぜられよ。」と、申しければ氏郷、

「なき名ぞと人にはいひてありぬべし
　心のとはばいかゞ答へん」

と、いへる歌の心の恥づかし。」とて、かの鐙を贈りけりとなり。

元弘の亂に菊池寂阿入道が、後醍醐天皇の勅命にて、敵の城に寄せける時、櫛田の宮の前にて馬のすくみたりしに、

もののふの上箭のかぶら一筋に

蒲生氏郷　武將。織田信長の女婿。
松が崎　松坂の北二粁、天正年中、蒲生氏の所領となる。
會津　岩代國（福島縣）西部の地。
細川越中守　名は忠興。

なき名ぞと云々、　後撰集、讀人知らず。

元弘　後醍醐天皇の元弘三年（一九九三）。
菊池寂阿　名は武時。第一課註參照。
櫛田の宮　福岡市博多祇園町の櫛田神社。

おもふこゝろは神ぞしるらん

と、詠みて神殿の大蛇を射て、馬のすくみ直り、既に討死すべき時、故郷へ一首の歌を書きつけてつかはしけるに、

ふるさとにこよひばかりの命とも
　知らでや人のわれを待つらん

と、詠みて忠義のために命を棄てけり。此等皆文武の人と申すべし。

大將ばかりにもあらず、名高き士は皆書を讀み學問し、和歌をも好きけり。梶原が一の谷にて、

武士のとりつたへたるあづさ弓
　ひきては人のかへすものかは

と詠み、賴朝奥州を攻めし時、白河の關を越ゆるに、梶原、

知らでや人の　「人」は武時の妻を指す。

梶原　平次景高。景時の子。景季の弟。
武士の云々　平家物語に出づ。
白河の關　創始の年代は不明。地は今、福島縣（磐城國）西白河郡古關村字關山にあり。
梶原　これは景季。

秋風に草葉のつゆをはらはせて
　君がこゆれば關守もなし

と、詠みけりとかや。

すべて學問して芳しき名を傳へたる勇士多し。文武は二つならず、詩歌を公家の玩び物と思へるは、無下に口惜しきことなり。

―（常山紀談）―

七　古城（ちじょう）

大類伸

我が國古城址の數多い中で荒涼の感がひし〳〵と身に迫る思ひのあるのは、實に會津若松の鶴が城でなければならぬ。私が若松に來た目的は、飯盛山の白虎隊の墓でもなければ、無論東山溫泉でもない。唯、荒れに荒れた鶴が城の廢墟にあつたのである。

私は若松に着いて宿を定めると、直ちに寫眞機を肩に城址を訪ふべく出掛けた。町の角を曲ると、廣い通りの突當りに、眞黑な森の立塞がつたのが見える。いふまでもなく、それが鶴が城である。やがて濠端に出ると、そのあたり一面に草が繁つて、古沼のやうな濠は葭と水草とで被はれ、石垣も亦

大類伸　明治十七年東京市に生る。文學博士。

會津　福島縣。松平氏の舊領。若松市、北會津・南會津・耶麻・河沼・大沼の一市五郡に分れる。

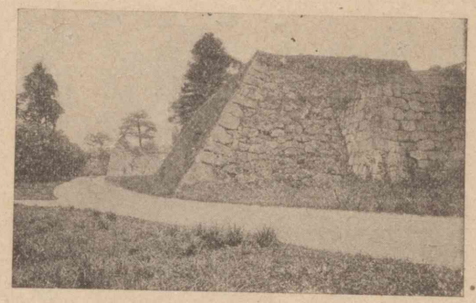
鶴が城　至德元年蘆名直盛若松城を修めて鶴が城とよんだ。天正十八年蒲生氏郷封に就いて改築。

飯盛山　若松市の東約一粁のところ。

白虎隊　戊辰の役に、會津藩中の少年十九名は團結して白虎隊と名づけ、勇戰して自刄した。

東山溫泉　若松市の東南四粁。

苔と蔦とで隱されて居る。その後には二の丸・本丸の石垣が幾重にも重なつて見える。この古びた荒廢した濠や石垣、それには何か奇怪な物語でもありさうな感じがする。



私は學生時代に泉鏡花の小說「白羽箭」を讀んで、氏の靈筆がこの古城を巧みに生かして居るのに感服した。「白羽箭」に書かれた次の傳說は、若松の廢城にあつてこそ始めて生きるのである。

「何といふ事なしに、お宮參りの婦人が、あなた、三枚襲の紋附で濠端を通りますと、土手の草が裾を引きましたやうに、婦人はする〳〵と落ちまして、お濠の

泉鏡花　名は鏡太郎。明治六年生。文學者。尾崎紅葉の門下。
挿繪　鶴が城址。

水の上にすべり込みました。眞晝中で、人通りはござりませなんだが、大勢伴が附いて居りましたので、『あつ』といふと直に引上げました。沈む間さへございませぬ、紅も流れず、白粉も綺麗なまゝで、もう彼の世へ參つた事でございます。」

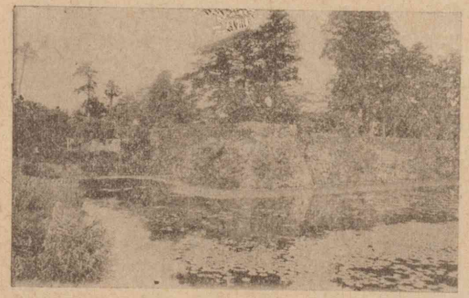
路は石垣に挾まれた狹い間を曲り紆つて、二の丸から本丸へと入つて行く。この紆餘曲折を極めた路は、今日でこそ交通に不便であるが、昔はこれが城の固めであつた。實に築城家の苦心の結晶である。本丸と云はず二の丸と云はず、全城すべて夏草の繁りに繁らぬ處はない。殊にウマゴヤシが誰憚る所なき有樣で、一面に蔓つて、綠の上に漂ふが如き白い花を咲かせてゐるのが如何にも心地よい。

本丸の中央には天守臺の址がある。その石垣の內部には

ウマゴヤシ　荳科に屬する草。「苜蓿」

深い凹みがあつて、多くの石が中に崩れ落ちて穴を埋めて居る。昔この石垣の上に、五重の天守閣が巍々として聳えて居た當時は、この穴は米鹽の貯藏場であつたとかいふ。一説にこれは拔穴で城外に通じて居たのだといふ人もある。今はたゞ崩れて落ちかさなつた石と、丈に餘る草とで埋められて居るに過ぎない。

本丸の隅に小さな茶店がある。その老主婦はよく話をする。私も亦面白いからいろ〳〵尋ねると、維新籠城當時の話を激越な調子で話す。滿城寂として聲なく、たゞ遠くに兵營の喇叭が聞



挿繪　鶴が城址遺手先。

兵營　歩兵第六十五聯隊。

える位なもの。この淋しい古城の址で維新の籠城談を聞いて居ると、何だか私も五十年の昔に返つた樣な氣がする。その中に、ある會津人の噂が出て、いろ〳〵と話をしたが、主婦は話の中に言葉を挿んで「あの人は平民です。」と言つた。聞けばこの主婦は、低いながらも士分の者であつたさうだ。「あの人は平民です。」の一語は明治・大正の言葉でない。私は生きた封建時代を眼のあたりに見る心地がした。—(史蹟めぐり)—

蟋蟀はうたひながら秋深む
月光はいつしか闇となり
つゆはいつしか霜となる
蟋蟀は唄ひながら昇天する。

(白鳥省吾)

白鳥省吾　宮城縣の人。明治三十三年生。詩人

八　松と大和心

池邊義象

自然は人生の鑄型で、人間は常にその鑄型の中に泳いでゐる。隨つてその影響感化の多大なことは、素よりいふまでもない。まして人間は種々に理窟をつけて、自然を味はうとしてゐるではないか。本居宣長が一たび敷島の大和心を櫻花に比して以來、また藤田東湖が萬朶の櫻を神州正大の氣の發して成つたものと唱へて以來、櫻は大和心の異名と稱へられるまでになつた。これは素より異論のないところで、誰も爭ふものはないが、余はたゞ櫻が大和心の特質全體を表してゐるとは信じない。そこでこれに松をつけ加へて、その缺を補ひたいと思ふ。

池邊義象　熊本の人。國文學者。御歌所寄人。大正十二年歿、年六十。

藤田東湖　名は彪。水戸の儒者。安政二年（一八五五）歿、年五十。

松の原產地はどこの國であるか知らないが、現世界に於て、我が國のやうに松の多い所はあるまい。また土地に適して、かやうに見事に發生してゐる國もあるまい。この點に於て、松は日本の木であるといつても差支はないと思ふ。かの日本武尊が「尾津の崎なる一つ松。」とお詠みになつたのは、隨分古いことであるが、松はそのずつと以前から、我が國の到る所にあつたものと思ふ。櫻が日本の花であると共に、松は確に日本の木である。

この松の、露霜を凌ぎ、雪霰を冒して、少しもその色を改めない高い操の如きは、今更いふまでもなく、我が大和心の雄雄しさに比べて、決して不足はない。また大抵の草木は美花を着けて、世に媚び人に阿る觀があるのに、松だけは不動の

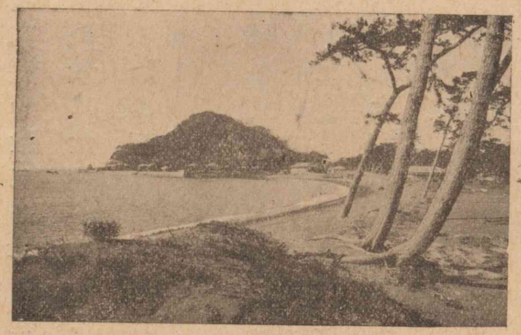
尾津の崎なる云々　尾張にたゞに向へる尾津の崎なる一つ松、あはれ一つ松、人にありせば衣きせましを、太刀はけましを。

姿勢をとつて、そんな人目を喜ばせるやうな群小のしわざを嘲笑して、いつも綠色を保持し、風潮に動かされない有樣は、正に大丈夫の態度を備へてゐると見なければならない。殊に年を經ると共に、その幹が龍の如く、虎の如く、鳳凰の如く、麒麟の如く、世人に畏敬され、愛重されるさまは、元勳・偉人にも譬ふべきであらう。

松は此の如く剛性のものであるが、一たび吹く風を宿せば彈琴の響を傳へ、或は長堤十里霞を曳き、霧を吹いて、まるで繪のやうな光景を呈することがある。また波打際に枝を垂れては水とその淸さを爭ひ、或は少年少女に引かれてその齡を延ばすなど、その優美柔和な點に於ても、また我が大和心に通ふことは決して少なくない。松島や、三保や、天橋立

の如き所謂天下の奇勝を以て鳴る土地が、松に負ふところの少なくないのも、國民がそれ等の勝地を歎賞して已まないのも、謂はれがないわけではあるまい。

かやうにいひたてれば限りもないが、剛柔兩性を具備して、堅忍不拔、泰然自若として風潮に動搖しないのは、自覺ある日本人に比して、斷じて不足はない。一時に咲き一時に散るその潔き有樣や、花に一點の醜を留めないその美は、櫻を以て花の第一とし、我が大和心に似てゐるところを賞するのは、今更い



挿繪　海岸の松。

ふまでもないが、この松の貴ぶべきところも、また大いに味はふべきである。この木は畏くも神前、宮庭をはじめ、津々浦浦に至るまで、一木を見ない所はなく、風景に、盆栽に、繪畫に、我が國人が昔からこれを好むのも、その心が互に相通ずる爲であらう。

あゝ、この松、剛柔兩性を備へる松、全國全家悉く有する松が、どうして我が國民に感化を與へないで居らうか。私はここに櫻と相並べて松を以て日本の木とし、大和心の象徴として、更に大いに賞揚したいと思ふのである。

九　心の置處

山本有三

伊藤一刀齋景久といへば、一刀流の開祖であるから、斯道の人でなくつても、大方は知つてゐると思ふ。全國を武者修行して歩いて、名ある人と技を鬪はすこと前後三十三回、唯の一度も敗を取つた事がないといふ劍道の達人である。或時、遍歴の途すがら、一刀齋は上總の國にやつて來た。すると、そこに劍槍に巧みな神子上典膳といふ士がゐた。一刀齋が來たといふので、早速試合を申込んで來た。しかし立合つて見ると、典膳はもとよりその相手ではなかつた。そこですぐに一刀齋の弟子となつた。是が後に一刀流を大成して世に弘めた小野二郎右衛門忠明の前身である。

山本有三　名は勇造。明治二十年栃木縣に生る。小説家。劇作家。

一刀齋　一刀流の祖。伊豆の人。

神子上典膳　德川家康の家臣。寛永五年（一二二八八）歿。

忠明がまだ典膳といつて、一刀齋に從つて全國を武者修行して歩いた時分の話である。一日、典膳は師匠の極意を訊ねた。すると一刀齋は、

「別に極意といふ程のものはない。たゞ油斷をしないのが第一だ。」といつた。そして稽古をしてくれるといふことは殆どなかつたが、坐つて居る時でも、歩いてをる時でも、典膳に少しの油斷でもあると、容赦なく「ぼかり〳〵」と撲りつけた。

或時、典膳が飯を食つてゐると、いつものやうに「ぼかり」と來た。しかし典膳はもう大分修練が積んでゐるから、「來たな」と思ふや否や、ぴたつと箸で受止めてしまつた。

「大分修業が出來て來たな、そのくらゐ油斷しないやうになれば、まあ大丈夫ぢや。」一刀齋は微笑しながら褒めた。

此の時ばかりは典膳も實に嬉しかつた。いつも撲られ通しで、痛い目ばかり見せられてゐたのに、始めて師匠から褒められたのだから、彼は本當にほつとした。

「お蔭を持ちまして……。」彼は恭しく師匠の前に頭を下げた。すると忽ち「ぼかり」とやつゝけられた。

「また油斷を始めたか。……」

「心を何處に置かうぞ。敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるゝなり。敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取らるゝなり。敵を切らんと思ふ所に心を置けば、敵を切らんと思ふ所に心を取らるゝなり。われ切られじと思ふ所に心を置けば、切られじと思ふ所に心を取らる

るなり。（中略）何處にも置かねば、我が身に一ぱいに行渡りて、全體に延び廣がりてある程に、手のいる時は手の用を叶へ、足のいる時は足の用を叶へ、目のいる時は目の用を叶へ、そのいる所々に行渡りてある程に、そのいる所々の用を叶ふるなり。萬一もし一所に定めて心を置くならば、一所に取られて用は缺くるなり。思案すれば思案に取らるゝ程に、思案をも分別をも殘さず、心をば總身に捨置き、所々に止めずして、その所々にあつて用を外さず叶ふべし。心を一所に置けば偏に落つると云ふなり。偏とは一方に片付きたる事をいふなり。（中略）たゞ一所に止めぬ工夫、これ皆修行なり。心は何處にも止めぬが眼なり。肝要なり。どつこにも置かねば、どつこにもあるぞ。心を外へやりた

る時も、心を一方に置けば、九方は缺くるなり。心を一方に置かざれば十方にあるぞ。」

是は澤庵禪師が、禪劍一如の妙趣を柳生但馬守宗矩に垂示した不動智神妙錄の中から抄出したものである。

油斷といふのは、心のうつろになることではない。心が一方にとられることをいふのだ。兎角、人は刀を手にすると、刀に心を奪はれる。學問をすると、學問に心を奪はれる。褒められると、褒められたことでいゝ氣になる。それが油斷である。

「油斷するな。」

「心をどこにもおくな。」

まるであべこべの言ひ方だ。

—（途　上）—

澤庵禪師　禪僧。正保二年（一三〇五）寂、年七十三。

柳生但馬守宗矩　新陰流の劍客。德川家光の劍術師範。正保三年（一三〇六）歿、年七十六。

一〇 夜叉王

岡本綺堂

人 面作師　夜叉王　源左金吾頼家
夜叉王娘　桂　下田五郎景安
同　楓　修禪寺の僧

時 元久元年七月十八日。

處 伊豆の國狩野の庄、修善寺村、桂川の畔、夜叉王住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面など懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素燒の土瓶など掛けたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹、其の後は畑を隔てて塔の峯つゞきの山、又は丘など見ゆ。二重の上手に續ける一間は細工場にて、三方に古りたる蒲簾

岡本綺堂　名は敬二。明治五年東京市に生る。劇作家。

元久　第八十三代土御門天皇の御代の年號（一八五八―一八七〇）

二重家體　舞臺用語。緣側などに見せるために、本舞臺の上に一段高くしつらへたもの。

上手・下手　見物席から見ての右を上手、左を下手といふ。

を下せり。庭前には秋草の花咲きたり。

楓、門に立ちて人を見送る體。そこに修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源頼家卿（二十三歳）、跡より下田五郎景安（十七、八歳）、頼家の太刀を捧げて出づ。

僧　これ〳〵將軍家の御微行ぢや、粗相があつてはなりませんぞ。

楓ははつと平伏す。頼家主從進み入れば、夜叉王も出で迎へる。

夜叉　思ひも寄らぬ御成とて、何の設けもござりませんが、先づあれへお通り下されませ。

頼家は緣に腰を掛ける。

夜叉　して御用の趣は。

御微行―おしのび

賴家　問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に殘さんと、曩に其の方を召出し、賴家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を經るも出來せず、幾度か延引を申立てて、今まで打過ぎしは何たる事ぢや。

五郎　多寡が面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも、百日とは費すまい。お細工仰せ付けられしは當春の初、其の後已に半年をも過ぎたるに、未だ獻上いたさぬとは餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、上樣の御機嫌散々ぢやぞ。

挿繪　夜叉王。（劇）

懈怠―けたい。

賴家　予は生れ付いての性急ぢや。何時まで待てど暮らせど埒明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、此の上は使など遣はすこと無用と、予が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ、仔細を申せ。

夜叉　御立腹恐れ入りましてござりまする。勿體なくも征夷大將軍源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職のほまれ、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年、未熟ながらも、腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意に適ふ程のもの一つも無く、更に打替へ、作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

賴家　えゝ、催促の都度に同じ事を……。其の申譯は聞きあい

等閑―なほざり。
延引―えんにん。

たぞ。

五郎　此の上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫を申せ。

夜叉　其の期日は申上げられません。左に鑿を持ち、右に槌を持てば、面は容易く成るものと思召すか。家を造り、塔を組む番匠なんどとは事變りて、これは生無き粗木を削り、男女・天人・夜叉・羅刹、ありとあらゆる善惡邪正の魂魄を打込む面、作師、五體に漲る精力が、兩の腕に自ら湊る時、我が魂魄は流るゝ如く彼に通ひて、始めて面も作られまする。但し其の時は半月の後か、一月の後か、或は一年・二年の後か、我ながら確とはわかりません。

僧　これ〳〵、夜叉王殿、上樣御自身も仰せらるゝ如く、至つ

腕―かひな。

て御性急でおはしますぞ。三島の社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取止めの無い事申上げたら、御疳癖が愈募らう程に。こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからうぞ。

夜叉　ぢやというて、出來ぬものはのう。

僧　何の、こなたの腕で出來ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば、京・鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉　さあ、それ故に出來ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜叉王といへば、人にも少しは知られた者。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に殘すのは、如何にも無念ぢや。

三島の社　靜岡縣田方郡三島町にあり、事代主神を祀る。

賴家　何、無念ぢやと……。さらば如何なる祟を受けうとも、早急には出來ぬといふか。

夜叉　恐れながら早急には……。

賴家　むゝ、おのれ覺悟せい。

　　疳癖募りし賴家は、五郎の捧げたる太刀を引取つて、あはや拔かんとす。與より桂走り出づ。

桂　まあ〳〵お待ち下さりませ。

賴家　えゝ、退け〳〵。

桂　先づお鎭まり下さりませ。面は唯今獻上いたしまする。なう父樣。

　　夜叉王は默して答へず。

五郎　何、面は既に出來して居るか。

早急―さつきふ。

賴家　えゝおのれ、前後不揃の事を申立てて予を欺かうでな。

桂　いえ〳〵、虛僞ではござりません。面は確かに出來して居りまする。これ父樣、もう此の上は是非がござんすまい。

楓　ほんに然うぢや。昨夜漸く出來したといふ彼の面を寧そ獻上なされては……。

僧　それがよい、それが可い。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出來した面があるならば、早う上樣に差上げて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉　命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知つた事でない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、其の面を持つて來て、ともかくも御覽に入れたが可いぞ。早う〳〵。

楓　あい〳〵。

楓は細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持出づ。

桂は受取りて、賴家の前に捧ぐ。賴家は無言にて少しく解けたる體なり。

桂　虚僞ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

賴家は假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲をあげる。

賴家　おゝ、見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎　上樣御顏に生寫しぢや。

賴家　むゝ。

飽かず打ちまもる。

僧　さればこそいはぬ事か。それ程の物が出來してゐながら、とかう澁つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢ

やゝ。

夜叉王形を改める。

夜叉　何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、斯う相成つては致方もござりません。方々には其の面を何と御覽なされまする。

賴家　さすがは夜叉王、天晴のものぢや。賴家も滿足したぞ。

夜叉　天晴との御賞美は憚りながらお鑑識違ひ。それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。

五郎　面が死んで居るとは……。

夜叉　年來數多打つたる面は、生けるが如しと人もいひ、我も許して居りましたが、不思議や、此度の面に限つて、幾度打

お鑑識―おめがね。

直しても生きたる色なく、魂魄も無き死人の相……。それは世にある人の面ではござりません。死人の面でござりまする。

五郎　そちはさやうに申しても、我等の眼にはやはり生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがのう。

夜叉　いや〳〵、どう見直しても生ある人ではござりません。しかも眼に恨を宿し、何者をか呪ふが如き、怨靈怪異なんどの類……。

僧　あ、これ〳〵、其のやうな不吉の事は申さぬものぢや。御意に適へば、それで重疊。あり難く御禮を申されい。

頼家　むゝ、とにもかくにも此の面は頼家の意に適うた。持歸るぞ。

怨靈―ヲンリヤウ。

重疊―チヨウデフ。

夜叉　たつて御所望とござりますれば……。

頼家　おゝ、所望ぢや。それ、

頼家は顎にて示せば、桂は心得て假面を箱に納む。頼家立つ。五郎も立つ。桂、箱を捧げて庭におり立つ。

僧　やれ〳〵、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜叉王殿、明日又逢ひませうぞ。

頼家行きかゝりて物に躓く。

頼家　おゝ何時の間にか暗うなつた。

僧進み出でて桂に燈籠を渡す。桂、假面の箱を僧に渡し、燈籠を持つて案内す。夜叉王はじつと思案の體。

―(修禪寺物語)―

二一 翼

吉江 喬松

私は小高い丘の上に立つてゐた。

澄みきつた秋の空は紫紺の色をたゝへて、無數の星がぴか〳〵光つてゐた。

私は丘の上の草の中に腰を下して、じつとして居た。すうつ、すうつと草の葉が擦れ合つて、下の野の方からは、蟲の聲が聞えて來た。

月の昇る前の東の空には淡青い光が漂つて、椋の樹の葉の落ちた枝が、細い幾本もの指を伸ばして、その光を摑むやうにしてゐた。

何處か頭の上で、さあつ、さあつと空氣を切つて飛ぶ物音

吉江喬松 明治十三年長野縣に生る。文學博士。早稲田大學教授。

がする。はつと思つて私は頸をすくめて見上げた。はつきり見極められないが、薄黑い鳥の影が列をなして行くのが目にはひつた。さあつ、さあつと翼の音が斷續する。

空氣が搖れて、顏へ頸へ冷たく當る。と思つてゐると、心が妙に跳るやうで、胸の動悸が高く打ちだした。體軀中波立つて血がめぐる。どつき、どつき鼓動する心臟の響と、さあつ、さあつと空氣を切る翼の音とは、調子を合はせて鳴つてゐた。

翼の音が少し遠くなり、微かになつて、その物音の中心が空を滑つて先へ〳〵と移つて行くと、冷たい空氣は幾重にも幾重にも輪を描いて波動を起し、その波動は次第に大きくなつて、丘の上に、野の草の葉先の末にも及んで行くと、蟲の聲はその波動につれて調子をとり、草の葉は同じく波立

つて搖れた。黑い空氣の波の振動、私の心臟もその中につゝまれて、ゆるく鼓動を立ててゐた。

ぼうつと野は明るくなつた。森の影が長く黑く黃枯れた草の上へ敷かれて、蟲は今目を醒ました樣に爭つて聲を立てた。

私は月の方へ向つて、胸へ深く光を吸ひ込んだ。

月の光の下に、瓦の屋根の並んでゐる都會が見えだして來た。いつもは騷がしい響の聞えてゐる都會が、その夜に限つて何の物音も立てなかつた。たゞ黑く見えてゐるばかりで、燒け跡かなにかのやうだ。

淡青い光を空にひろげて、次第に月は昇つて來た。丘の下の野も一層廣く明るくなつて、藪蔭がぼつり〳〵立つてゐるのも見えた。ふるへるやうな水溜も見えた。光の波が、今度は空にも地上にも漲り溢れてゐた。私の體軀の細い血管の中迄も、その波がくゞり入つて、體軀全體がすつきり透りでもするやうな氣がする。

私は暫くじつとして立つてゐた。

さあつ、さあつと、また物音が空に聞えてゐた。私はまた、はつと思ふと、動悸が打出した。何物かの襲來を受けたやうに。頭を仰向けたが、その物音の姿は見えない。が、前よりも一層近くその音は聞えて來た。一層低く、私の體軀よりも一層低

く、丘の中腹を掠めて行くやうだ。

私はその響の來る方へ鋭く視線を向けた。雁の群だ。十羽ばかりの雁が横に並んで、ゆるく羽を搏ちながら翔つて行く。右の端にゐる一羽の鳥が他のものよりも少し先へ出て、時々頸を左右に動かし、頭を高く昂げて、勢好く舞つて行く。

群鳥の背を滑つて視線が少し先の草原へ落ちると、そこには舞ひ行く鳥の影が、草原の上を斜に流れて行くのが見える。野の果ての低い空には、大きな星が澄んだ光できらきらしてゐるのも見える。

大きな鳥の一隊の群、荒い羽搏き、動く長い頸、その一團の生命の波動を身近に感ずると、私は怖ろしさと不思議さに、思はず聲を立てようとした。私の生が、形の異なつた、羽を持

ち翼を持つた私の生が、いま目の前を翔つて行く。周圍が暗くなつて、たゞ暗い音の波動だけが、空にも地上にも充ちてゐるやうな氣がした。

暫くたつた。見ると、雁の群はもう稍遠く隔つて、羽搏いてゐるとも思はれない。たゞ薄黑いものが、ずん〳〵空を流れて行くやうだ。光の波を搔き亂し、音と光とが空に亂れて不思議な波動を起し、睡つてゐる地上の草木や人家の屋根に、奇妙なリズムを響かせて行くのだ。

鳥の過ぎた後の野原は、またひつそりとして、月の光が枯草の根元までも、根元の土の小さな塊團にまでも射しこんで、大地の胸は冷たいその光を飽く迄も吸つてゐた。

—（若き自然）—

一二　鳥の生活と談叢

藤澤衛彦

我々は日本に生まれて、幼少の頃から舌切り雀の童話を聞かせられてゐる。

舌切り雀の童話では、要するに、可愛らしい雀が殘酷な老婆に舌をちよん切られるところに、最も雀に對する同情を繫がらして、例の「舌切り雀、お宿はどこだ。」と善いお爺さんが尋ねて行くところに好奇がつながれて行ってしまひ、我々は、なぜ雀が舌を切られたかについて、深くかへりみることが無くて長く過ぎた。

舌切り雀は、糊を、お婆さんの大切な糊をなめて、舌を切られたのだ。然もこのやうに人家に近づいておばあさんの糊

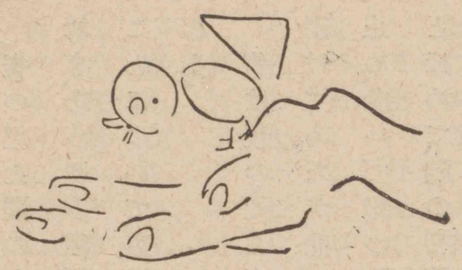
藤澤衛彦　明治十八年、埼玉縣に生る。明治大學教授。

をなめる小鳥が何で雀であつたか。それを考へて行くうちに思ひあはせられることは、雀の無遠慮な押しつけがましい親しみの習性である。

かへりみるに、人類文化の擴がつて行くところ、必ず雀の存在がある。「騷々しくて、横着で、我を張つて、口論好きな性質。」と書かれた西洋の雀の存在は、日本でも、

雀や　鈴ふれ
鐘たゝけ
鳶　とろろ
笛吹いて見せろ

と謠はれて、その鈴を振るやうに、鐘を敲くやうに振舞ふ騷



挿繪　雀。北原白秋筆。
雀や云々　信濃國の童謠。

騒しさと、田畑を荒らす横着さとには、人間は常に案山子をかけて威してゐるが、追ひ盡くすことは到底出來ずに居る。

「雀の絶え間のないペチヤペチヤ囀り、チユウチユウ鳴き騒ぎ、あらゆる種類の穀物や果物や野菜等を荒らしまはることについて、東洋の天然傳說童話は、次のやうに語り繼がれる。

雀は、親の死んだ知らせのあつた時、ちやうどお齒ぐろを附けてゐたが、悲しい知らせに驚いて、お齒ぐろつける手を止め、急いで親の許へ駈けつけた。それで、天帝が、孝行者ぢや、とほめて、稻の初穗を食ふことを許された。雀の嘴を見ると、下の嘴が黑くて上の嘴の白いのは、お齒ぐろをつけるのを半分で止めたからである。

雀は、お釋迦樣の死を聞いて驚いてかけつけたので、死に目にお逢ひすることが出來たが、燕は紅・鐵漿つけてお化粧して出かけたので間に合はなかつた。それで、雀には五穀を食べることをゆるされたが、燕には、罰として蟲のほかは食べられないやうにされた。

これらの傳說童話は、雀の飾り氣のないところに簡單な解釋を施したもので、雀の習性から來る傳說・童話は、東洋では、古來最も人に親しい爲、よく子供に卵をぬすまれ、偖また舌切り雀の婆に舌を切られることにもなる。「勸學院の雀は蒙求を囀る。」といふ諺も、要するに雀が人間と共にあつて、親しみを增して來る鳥ゆゑに喩へられたものである。勸學院の所在地は、俗に「雀の森」といふところで、もとから雀が多い。

燕は云々　土食つて、泥食つて、口濯い。おいらばつか、泥食つて、雀ばつか、米食つて、あゝ濯い濯い。（伊勢國童謠）

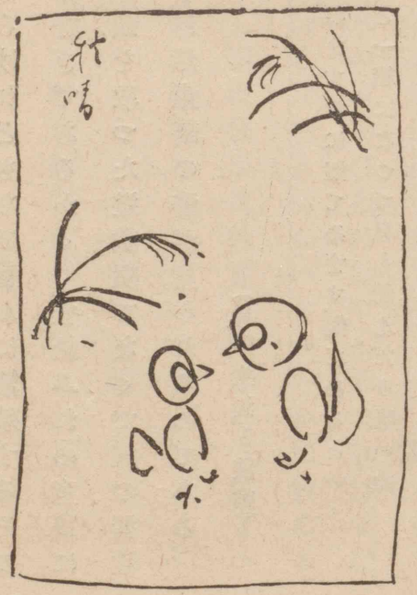
勸學院　中古、藤原氏の子弟を敎育する爲に設けた私立學校で、京都、左京、三條の北、壬生の西にあつた。

蒙求　三卷。晉の李瀚の著。經史の中から古人の事蹟

「この勸學院にをるところの下人・僕まで、見習ひ聞き習うて蒙求などを讀むといふことなり。」と漢語大和故事は註してゐるが、一歩なほこの諺には、「雀の森の雀までも聞き習ふ。」の意を籠めてゐる。ともかく雀は人間と隣接し、人間の行くところ、文化の擴まつて行くところ、何處までもそれを追つて同族を擴め、人間の住まない所や文化の行かない所には、雀も決してまた行かないといふ。繰り返していふ、例の雀と燕との天然説話に、釋迦佛が御病氣の時、雀は直ぐにかけつけたが、燕は紅・鐵漿つけて遲れたといふ罰で、雀には米を食べる權利を與へ、燕には蟲食ひしか許さなかつたといふ説話も、まこと雀が身輕に人類を追つて行つたことを物語るに過ぎない。また釋迦の死床に侍したといふ思想は、あたりに

の五に類似したものを對せしめ、四字句の韻語を以てこれを綴つたもの。

住む鳥が、人類の死に交渉して、靈魂の去るを氣や影に喩へ、その氣を鳥とした一種の表象化である。また、雀が騷々しくて、横着で、我を張つた口論好きなことも、幾多の傳承を持ち、和漢古諺には、「雀百まで踊やまず。」とあり、堀川狂歌集には、「雀ほどちひさく老の身はなれど、浮いたる人はをどりわすれず。」と蔑まれてゐる。



その他、雀があらゆる種類の穀物や果物や野菜類や、わけ

和漢古諺　二卷。貝原益軒の著。

挿繪　雀。北原白秋筆。

堀川狂歌集　一卷。編者不明。

ても豆類を荒らすことは、人間には甚だ厄介なことで、このために雀小弓の式を遺し、案山子の威しにかけるばかりでなく、年中隨分殺されるけれども、なほ盛んに繁殖する。その上、おしやべりで喧嘩好きである。かくて「雀鈴ふれ」の童謠にも、それがあながちに韻を取つた遊戯唄でなくて、雀の習性の眞實を謠つてゐる自然童謠の姿が見られるのである。

—（鳥の生活と談叢）—

私は雀を觀てゐます、常に觀てゐます。觀てゐるといふよりは、常に雀と一緒になつて、私も飛んだり啼いたりしてゐます。雀は全くかはいい。彼は全く素朴で誠實です。極めて神經がこまかで、悧巧で、時々慌てて、うぶで單純で、それはあどけないものです。

（北原白秋）

雀小弓の式　日本の古い民俗のうちに、雀を括つて的として、小弓を射る行事。時は年の始め。弓は二尺七寸のもの。

一三　小園の記

正岡子規

我に二十坪の小園あり。園は家の南にありて、上野の杉を垣の外に控へたり。場末の家まばらに建てられたれば、青空庭の外に擴がりて、雲行き、鳥翔る樣もいとゆたかに眺めらる。初めてこゝに移りし頃は、僅かに竹藪を開きたる跡とおぼしく、草も木も無き裸の庭なりしを、やがて家主なる人の小松三本を栽ゑて、稍物めかしたるに、隣の老嫗の與へたる薔薇の苗さへ植ゑ添へて、四五輪の花に吟興を鼓せらるゝことも多かりき。

一年軍に從ひて金州に渡りしが、其の歸途病を得て、須磨に、故郷に、思はぬ日を費し、半年を經て家に歸り着きし時は、

正岡子規　俳人・歌人。名は常規。松山市に生る。東京帝國大學國文科に學ぶ。明治三十五年歿、年三十六。

小園　東京市下谷區上根岸町。

一年軍に從ひて云々　作者が日清戰爭に從軍記者として行つたことをいふ。

金州　關東州の都邑。金州

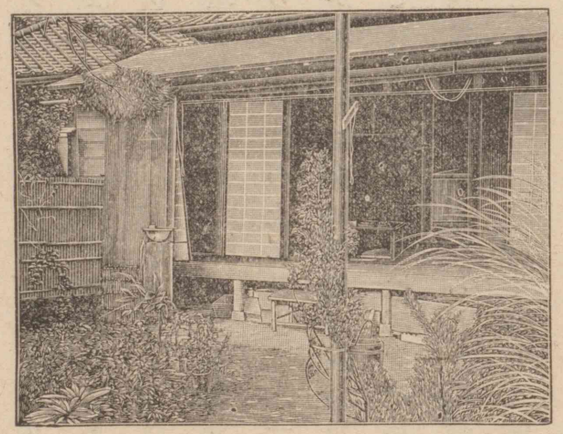
秋將に暮れんとする頃なり。庭の面去年よりは遙かにさびまさりて、白菊の一もと二もとねぢくれて咲き亂れたる、此の景に對して靜かに昨日を思へば、萬感そゞろに胸に塞がり、辛き命を助かりて歸りし身の衰は、たゞ此の嬉しさに勝たれて、思はず「三逕就荒」と口ずさむも涙がちなり。ありふれたる此の花、狹くるしき此の庭が、斯くまで人を感ぜしめんとは、曾て思ひよらざりき。ましてこれより後、病いよ〳〵募りて足立たず、門を出づる能はざるに至りし今、小園は余が天地にして、草花は余が唯一の詩料となりぬ。余をして幾何か獄窓に呻吟するにまさると思はしむるものは、此の十歩の地と數種の芳葩とあるがために外ならず。

次の年、春暖漸く催して、鳥の聲いとうらゝかに聞えしあ

灣に臨む。故郷愛媛縣松山市。

三逕就荒　逕は小徑なり。陶淵明の歸去來辭に「三徑荒ニ就キ松菊猶存ス。」

る日、病の窓を開きて、端近くにじり出で、讀書に勞れたる目を遊ばすに、いき〳〵としたる草木の生氣は、手のひらほどの中にも動きて、まだ薄寒き風のひや〳〵と病衣の隙を侵すも、いと心地よく覺ゆ。これも隣の嫗より貰ひしといふ萩の刈株、寸ばかりの綠をふいて、逞しき勢は秋の色も思はる。眞晝過より、夕陽椎の樹に落つるまで、何を見るともなく、醉うたるが如く、勞れたるが如く、うつとりとして日を暮らすことさへ多かり。



挿繪　小園の圖。

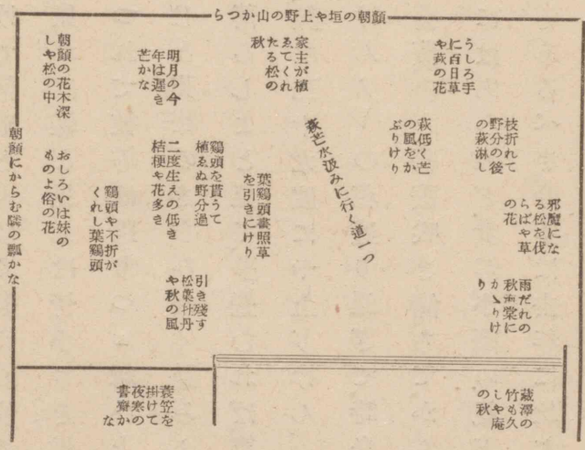
今まで病と寒氣とに惱まされて、弱り盡くしたる余は、此の時新に生命を與へられたる小兒の如く、是より萩の芽と共に健全に育つべしと思へり。折ふし黄なる蝶の飛び來りて、垣根に花をあさるを見ては、そゞろに我が魂の自ら動き出でて、共に花を尋ね、香を探り、物の芽にとまりて、しばし羽を休むるかと思へば、低き杉垣を越えて隣の庭をうち廻り、再び舞ひ戻りて、松の梢にひら〳〵、水鉢の上にひら〳〵、一吹き風に吹きつれて、高く吹かれながら、向の屋根に隱れたる時、我にもあらず惘然として自失す。忽ち心づけば、身に熱氣を感じて、心地なやましく、内に入り、障子たつると共に、蒲團引被れば、夢にもあらず、幻にもあらず、身は廣く限無き原野の中にありて、今飛び去りし蝶と共に狂ひまはる。狂ふに

つけて、何處ともなく、數百の蝶の群れ來りて遊ぶを、つらつら見れば、蝶と見しは皆小さき神の子なり。空に響く樂の音につれて、彼等は躍りつゝ舞ひ上がり飛び行くに、我もおくれじと茨(ばら)葎(むぐら)のきらひなく踏みしだき、躍り越え、思はず野川に落ちしよと見て、夢覺むれば、寢汗したゝかに襦袢を濕して、熱は三十九度にや上りけん。

げん〳〵の花盛り過ぎて、時鳥の空におとづるゝ頃は、赤き薔薇、白き薔薇咲き滿ちて、かんばしき色は見るべき趣なきにはあらねど、我が小園の見どころは、まこと萩芒の盛りにぞあるべき。今年は去年に比ぶるに、萩の勢強く、夏の初の枝ぶりさへいたく蔓りて、末頼もしく見えぬ。葉の色も去年の稍黄ばみたるには似ず、綠いと濃し。空晴れたる日は、椅子

茨　野薔薇の異名。
葎　茜草(アカネグサ)科の一年生又は二年生の草。
げんげんの花　れんげさう(紫雲英)のこと。

を其のほとりに据ゑさせ、人に扶けられ、やうやく其の椅子にたどりつき、氣晴らしがてら萩の芽につきたる小さき蟲を取りしことも、一度二度にはあらず。



桔梗・撫子は實となり、朝顔は花の稍少なくなりし八月の末より、待ちに待ちし萩は一つ二つ綻び初めたり。飛び立つばかりの嬉しさに、指を折りてあすは四つ、あさつては八つ、十日

目には千にやなるらんと思ひ設けし程こそあれ、ある夜野分の風烈しく吹き出でぬ。安からぬ夢を結びて、あくる朝、日たけて眠より覺むれば、庭に何やらのゝしる聲す。心許なく這ひ出でて、何ぞと問ふ。今までさしも茂りたる萩の枝、大方折れしをれたるなりけり。ひたと胸つぶれて、いかにせばやと思へど、せんなし。斯くと知りせば、枝に杖立てて置かましをなど悔ゆるもおろかなりや。瓦吹き飛ばしたる去年の野分にだに、かうはならざりしを、今年の風は萩のために方角や惡しかりけん。此の日は晴れわたり、稍秋氣を覺え初めしが、余は例の椅子を庭に据ゑさせ、バケツと金盥とに水を湛へて、折れ殘りたる萩の泥を洗ひたりしかど、空しく足の痛みを增したるばかりにて、泥つきし枝のさきは、蕾腐りて、終

に花咲くことなかりき。園中何事もなきは、只松と芒とのみ。

去年の春、彼岸やゝ過ぎし頃と覺ゆ。鷗外漁史より草花の種幾袋贈られしを、直ぐに播きつけしが、百日草の外は何も生えずしてやみぬ。中にも葉鷄頭を欲しかりしを、いと口をしく思ひしが、何とかしけん、今年夏の頃、怪しき芽をあらはししものあり。去年葉鷄頭の種を埋めしあたりなれば、必定それなめりと、竹を立てて大事に育てしに、果して二葉より赤き色を見せぬ。嬉しくて四邊の畫照草など引きのけ、やうやう尺餘になりし頃、野分荒れしかば、これぱかり氣遣ひしに、思の外に萩は折れて、葉鷄頭は少し傾きしばかりなり。扶け起して竹杖に縛りなどせしかば、恙なくて今は二尺ばかりになりぬ。痩せてよろ〳〵としながら、なほ燃ゆるが如き

鷗外漁史　森林太郎の號。

百日草

畫照草　松葉牡丹の異名。

紅しだれて、いとうつくし。二三日ありて、向の家より貰ひ來れりとて、肥え太りたる鷄頭四本ばかり植ゑ添へたり、其の次の日なりけん、朝まだきに裏戸を叩く聲あり。戸を開けば、不折子が大きなる葉鷄頭一本引提げて來りしなりけり。朝霧に濡れつゝ手づから植ゑて去りぬ。鷄頭・葉鷄頭かゞやくばかり華やかなる秋に壓されて、萩ははや散りがちなるもあはれ深し。薔薇・萩・芒・桔梗などを惠まれて、余が小樂地の創造に力ありし隣の老嫗は、其の後移りて他に在りしが、今年秋風に先立ちてみまかりしとぞ聞えし。

ごて〳〵と草花植ゑし小庭かな

―（子規全集）―

不折子　中村不折。名は鉾太郎。慶應二年長野縣に生る。洋畫家。

一四 草と蟲

若山牧水

秋も末、冬の初の日向などに、落葉に莖を埋められて咲いてゐる龍膽は、實に清々しい。濃紫にいくらか藍の混じたやうな深い色で、それはどうしても、落葉の早い山國でなくてはよく見られない。

つゞらをりはるけき山路のぼるとて
路に見てゆく龍膽の花

同じく秋の終の花に刈萱があり、吾木香がある。寂びたやうで、想の外に艶麗なのは吾木香であらう。刈萱もまた見るにつれて、暖かみを感じられる花である。すがれ始めた野邊の日向の花としてふさはしい。

若山牧水 名は繁。宮崎縣の人。歌人。紀行文家。昭和三年歿、年四十四。

われもかう

艶＝艶

秋の初から終まで、その時その時に見て見飽かぬのは薄である。

わが越ゆる岡の路べの
すゝきの穗まだわかけ
れば紅ふゝみたり

の頃もよく、十五夜・十三夜の月見には、何はなくともこの花ばかりは供へたく、また秋もいつしか更けて、八千草の枯れ伏した中に、この花だけがほの白い日影を宿して戰いでゐるのも、わびしいながらに、なくてはならぬ風情である。

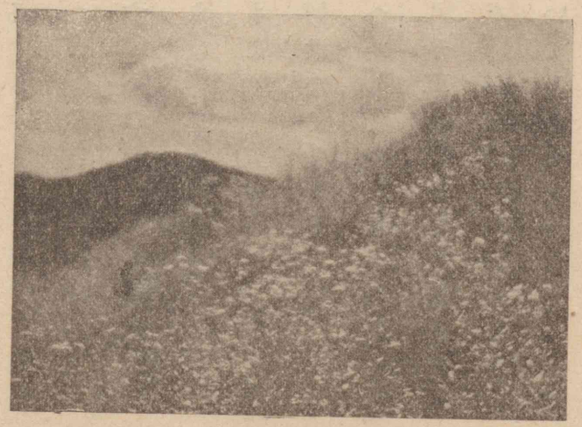
薄＝芒

挿繪 薄。

野菊・姫紫苑も見落してはならぬものである。

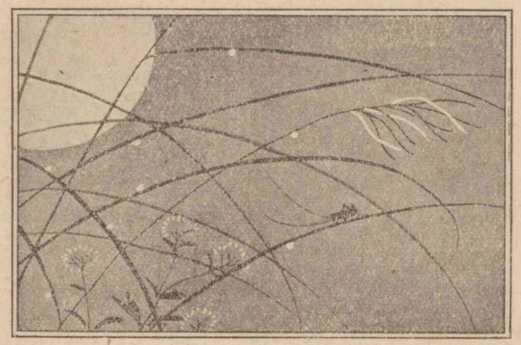
庭園の花にはダリアあり、コスモスあり、黄菊・白菊あり、鶏頭がある。ダリアは夜深く机の上に見るがよく、コスモスは小春日和の窓に恰好である。鶏頭は素朴な花で、塵寰を避けて栖む庭の隅などに咲くべきであらう。

うごかじな動けば心散
るものを椅子よダリア
よ動かずもあれ



挿繪 野菊。

くれなゐの色ふかみつゝ鶏頭の
花はかすかに實をもちにけり



薄の花を蟲に譬へるなら、まづこほろぎではあるまいか。さほど際立つたものでなく、さていつ聞いてもしみ〴〵させられるのは、こほろぎの音である。

わがねむる家のそちこち
音に澄みてこほろぎの鳴
く夜となりにけり

松蟲や、鈴蟲や、轡蟲は、餘りに月並化されて居る。では、どの蟲が最も好きだらうと考へて見る

挿繪 蟲。

に、私にはまづ馬追蟲である。常に田舍住ひをして居る有り難さに、この蟲がをりふし蚊帳に飛んで來て、澄みきつた音で鳴くのを聞く。

やすらかに足うちのばしわが聞くや
　蚊帳に來て鳴く馬追蟲を
いへ人のねむりは深し蚊帳にゐて
　鳴く馬追よ聲かぎり鳴け

一五 短詩二章

銀杏

西條八十

十月の朝の辻に、
並びたつ四本の銀杏。

ゆきすぎて、またふりかへる、
青空の日光はうすし。

あゝ神も寂しきときは、
翻とりでうたひたまふか。

西條八十 明治二十五年東京市に生る。早稲田大學英文科出身。詩人。早稲田大學教授。

翻 鷲ペン。

十月の朝の空の、
燦けき金の四行詩。

厩

三木露風

ことことと、厩より
音きこゆ――
深き夜の靜けさに、
なほひとり眠らざる獸は

四行詩　西洋古來の詩の形式の一。

三木露風　明治二十二年生。名は操、曾て羅風と號す。詩人。

息あらし。
生みし子は二日まへ
死したりき。
母の馬さびしげに居殘れる
厩より音きこゆ
ことことと……。

一六 アルプの秋

槇 有恆

アルプの牧場に寒風が吹き渡つて、草の色も枯れて早くも暮れる短い日脚を見ては、牧夫も牛も村へ再び歸る支度を急ぐ。

山の綠野に牛と共に朗らかな安らかな日を送つてゐる彼等は、實に歌好きである。雷を聞き、過ぎゆく雲の峰を送り、そして斷崖や森に木靈を反してヨードラーを歌ふ。

その歌聲が、夏の間、朝露のアルプに聞える。牧夫と牛とは友達のやうなものだ。彼等の泊り場所は大抵牛小屋の端を仕切つた室だ。其處に山羊も來る、豚も來る。皆一緒で夏の間を暮らす。

槇 有恆 明治二十七年、仙臺市に生る。慶應大學法律科出身。登山家。

アルプ 歐洲の最大山系。西北はフランス・ドイツ・スキス、南はイタリーに跨る。

木靈—こだま

ヨードラー 牧羊歌。

九月も半ばを過ぎると、村は下山の牛の鈴の音に滿ちる。涼しいその音が、秋晴れの塵一つ無い村の隅から隅へと響き渡る。山から下る冬に追はれて里に來るのだ。村の日當りの好い牧場では、其の頃は丁度三度目の草刈をしてゐる。親子揃うて、草を刈る、乾す、運び込む。森も色づく。宿の庭のカスタニヤの大きい葉も風無きに散り初める。喜びを追うたエトランヂェは一人殘らず都へ歸つてしまつた。

九月の或日、私は何時も散歩に行く下氷河の左岸の崖を傳つて登つて行つた。三時間ばかり登りつめると、突兀としてシュレックホルンの峨々たる姿が東に現れる。南にはフイッシャーヘルナーの四千米の頂と、永遠の冬を保つ其の北面の氷雪の斷崖、南西から西へかけてメンヒやアイガー

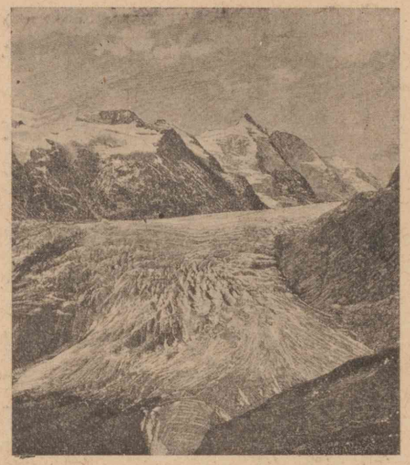
カスタニヤ 栗に似たる植物。

エトランヂェ 外國人。(佛蘭西語)

シュレックホルン・フィシャーヘルナー・メンヒ・アイガー 共にアルプ山中の高峰。

頂項頂

の巨峰が手に取るやうに聳える。そして此等の峰々と自分との間を埋めるものは、下氷河やそれらの注ぐ大小幾多のフィルンである。山麓を裝うた草の色は褪せて、此處は既に秋は深い。只時折氷河雪崩の遠鳴りや、或は直ぐ傍の堆石の土堤の蔭にムルメルティルが鳴く。其の鋭い絹を裂くやうな聲が靜かなまばゆい日和の中を響く。自分は無心に氷河の底を流れる溪流の音を聞く。土產にエーデルヴァイスをと思つて、崖に登つた。そこは人の恐れて來ない場所だ。それだけ



フィルン　氷海。

挿繪　アルプとその氷河。

ムルメルティル　山鼠。

に、上に出ると、一面のエーデルヴァイスのお花畑だ。幾度此處に獨り來て山を眺めたことであらう。其の時も花はあつた。だが、眞夏の純白の、ふつくりとした姿の柔かみは失せて、蕊も露はれて褪色を帶びてゐる。只、此の頃アルプに咲出すものは龍膽である。秋の空の色を寫して咲くのであらう。

宿の室は皆閉ぢて、バルコンの日當りに羊毛を乾してゐるお神さんは「豚三匹を二千フランで賣つた。」と喜んでゐる。村の巡査も、外客が居なくなり正裝する必要もないと見えて、金色燦然たるサーベルを戸棚に仕舞つた。

飽くまで人も自然の子なのだ。自然が寂然として沈靜を望む時に、人も同じやうな思ひに凝るらしい。只自然は無言だ。だが人間は過ぎた活々した時の記憶に堪へかねて、來年

エーデルヴァイス　みやまうすゆきさう（高山植物の一種）。

蕊＝蕋

バルコン　露臺。張出縁。

フラン　佛國の貨幣の單位。我國の約七錢八厘餘に當る。

の希望を語つてゐる。

十月に、牛も山から下り切つて、草の刈り入れ、馬鈴薯掘りなどが濟んだころ、村には年に一度の市がかゝる。賣物屋が五六軒、果物屋が一軒である。小間物店ではセルロイドの櫛、けば〳〵しい色のリボン、ホルツ・ボーデン、針、アメリカ軍人の古服などを雜然と並べて、店の爺が大聲に客を呼んでゐる。子供等も集つて玩具を欲しがつて見てゐる。娘共はリボンが高過ぎると値切つてゐる。爺はアメリカ軍人の古カーキーをひやかして婆さんに懷を相談する。此の僅かな店を中心に、一日、年寄も若い者も集つてしやべつてゐるが、別段に購買が目的ではないのだ。さうして精々燒栗の五錢も買ふ中に日が暮れてしまふ。それだけで十分の樂しみと變化

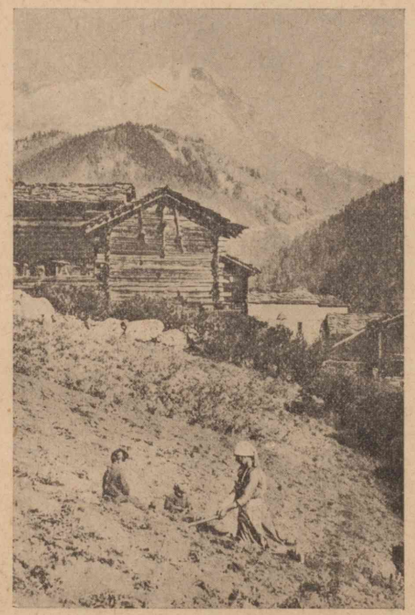
ホルツ・ボーデン　木底靴。

とが得られる人達なのである。

此の頃にシュッツェン・フェストと云つて射的の競技會が催される。一體に瑞西人は昔から射的を好んでゐるのだが、單に軍事上の目的のみでなく、心からそれを樂しんでゐる。大會の催される町では、二三日前から萬國旗や花で辻や街路を飾る。其の日になると、椅子を並べた荷馬車に村の娘や男共を滿載して、四方から集つてくる。馬車の上の者共は手風琴に合はせて歌ふ。花を投げる。實に賑やかな騷である。

競技が濟むと行列が始る。村々から選んだ美しい娘や子供が、土地の古風俗で行くのもある。町の端から端へ練つて行く。見物人が騷ぐ。子供が飴をしやぶる。隅の廣場に見世物がかゝつてゐる。覗眼鏡に、木馬乘り、射的の煙草落しに、珍世

界、雜然として人波を盛り返してゐればそれでいゝのだ。一體に山村の祭は純であつて、人懷かしいものである。農夫たちは決して豐かな生活は出來ないが、他と交易して生計を立てて行かねばならぬ程でもないのだ。乳も馬鈴薯も自家生產で、また自家消費が多い。そして一年の中の夏の盛は殆どアルプに四散してゐるので、一村擧つて團欒する場合が無い。又劇場も無ければ、音樂を聽く場所も持たぬ。それで



挿繪　アルプの麓

年中行事として人々は祭を期待する。此のシュッツエンフエストも其の一つである。

此の山村は餘裕は無いが不自由も無く滿足した生活、其の滿足さの上に何時も變りのない心持の人達にも、年と共に人が殖えれば生活苦が寄せて來る。秋になると、きつと一家族や二家族位美しい故郷の谷を棄ててアメリカに移住するものがある。別れの日こそは悲しい場面である。山間の人は思郷病に罹り易いさうだ。多くも無い家財を纏めて、老人を始め抱かれた幼兒まで打揃うて、せめての名殘に村の料理屋に一夕樂しんで立つて行く。送る者も送られる者も涙だ。人間到る處青山ありだ。何を女々しく涙にくれよう。しかし年老いて移住をせねばならぬのは單なる道樂では無

人間到る處云々
男兒志ヲ立テテ鄕關ヲ出ヅ。學若シ成ラズンバ死ストモ還ラズ。骨ヲ埋ム豈墳墓ノ地ヲ期センヤ。人間到ル處青山有リ。

い。

去り行く者多くして來る者無き晩秋、村は靜かな日を繰り返して老いて行く。そして朝夕に教會の鐘が無限の情を含んで鳴り響く。下界には涙がある。併し一度山を仰げば、そこには憎しみや歎きから超えた世界が燦然として輝くであらう。

—(山　行)—

一七　碓氷だより

徳富蘆花

舊輕井澤より、黃葉疎枝の山路二十六町許上れば、則ち碓氷の頂上に候。熊野神社あり。神社を護して十五六軒。神社は街道より幾十級の石段を上りて東南に面し、神殿・拜殿・神樂殿幾年の風霜に飽き、神鈴語らず鳥歌はず、寂々たる社內の風物いとゞ神寂びて、ゆかしく候。試みに石段の上に傘を杖ついて望を凝らし候へば、廣漠の景は雙眼の中に歸し候。右手には輕井澤の谷一圓、黃落せる木の枝の間より隱見し、前面には妙義の頭を見越して、甲斐・秩父の連山と面々相對し、轉じて左手の方は榛名・赤城の諸峰東北に流れて、手を伸べて背を撫すべきが如く、足下には碓氷一鄕の稻田黃河流る

徳富蘆花　名は健次郎。熊本の人。文學者。昭和二年歿。年六十。

舊輕井澤　長野縣北佐久郡鐵道驛の在る新輕井澤に對して、舊來の宿驛をいふ。

熊野神社　俗に「碓氷權現」といふ。

妙義　群馬縣西南部の山。

榛名・赤城と對立して上州三山と稱せられる。

榛名　群馬縣中部の火山。其の中に榛名富士（一四四八米）が峙つ。

赤城　群馬縣東部にある火山。（一八二八米）。

るが如く、丘陵に從ひ迂曲して、高崎に至つて茫々たる平野の海にうち出し、眼を放てば海よりも廣き、兩毛・武總の野、杳々天末に連なり、黄なるものは田、黑きものは村、粉壁の白く輝ける、川流の白銀の帶を曳ける、心は望むに隨つて濶く、坐ろに人生悠々の感を催すものこれあり、千載の前、曾てこの嶺上に頭を回らして吾妻の空を眺め、亡き姫を懷かしみ給ひし小碓の尊の昔も、今更にしのばれ候。

絶頂より十町許も下り候へば、道の三叉をなせる所に、「霧積温泉道、從是一里……町。」

高崎　群馬縣高崎市。

兩毛　上野・下野の二國。

挿繪　碓氷附近の圖。

小碓の尊　日本武尊の御名。その妃弟橘姫が尊の危急を救ふ爲に相模の海上で投身し給ひしは景行天皇の四十年（七七〇）のこと。

霧積温泉　碓氷郡にある冷泉。

と記せし路標の、たゞ一本寂しげに薄の中に佇み居り申候。概して絶頂より半道餘りの間は薄と松との世界にて、紅葉は殆どこれなく、あるは、已に散りたるあとにて、たゞ骨ばかりなる樹木叢をなし、其の間に枝ぶり面白く、染めたるやうに翠なる松の此處に一本、彼處に一本、まばらに散在して風致を添へたると、枯薄の限りなく山に滿ちて、山もまた白頭となりしかと思はるゝ程なるとのみに御座候。この薄の山を過ぎ候をりふし、淺間の方俄にかき曇り、麓は日影明かにさしながら、山は一點二點の時雨はら〳〵と帽に落ち申候。

しぐるゝや薄分けゆく山三里

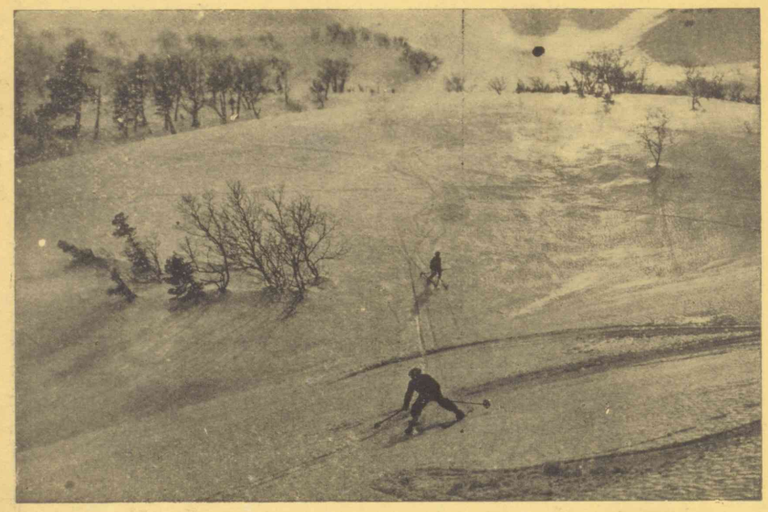
などうち吟じて急ぎ候程に、滿山の時雨薄に落ちて、恰も人のものいふやうに御座候。空山聲なく、唯時雨の枯薄に落つ

空山聲なく云々　王維の詩

る音と、時に木枯の一陣樹間にわたりて、落葉さら〳〵と鳴るのみに有之、身はこれ王維畫中の人ならずば、韋蘇州詩中の人にや候はん。一心水の如く澄んで、何となく氣森然と改りたるやうに覺え候は、孟郊の所謂「山中人自正」なるものにも候べきか。路は落葉多き所に入つて、時雨益〻音高く相成候。

傘を傾け道を急ぎつゝ、獨り空想に耽りてあゆみ候程に、ふと心づけば、時雨はいつか過ぎて、身はすでに紅葉世界に落ち居り申候。遊蹤狹き小生のことゝて紅葉といへば、たかが京都三尾の秋を見たるばかりの眼は、今一驚を喫し候。何がなし、我が立つ岨を中心として、碓氷の東西悉く錦に候。左方の山谷を見れば、たゞこれ一面の錦、右の山谷を見れば、またこれたゞ一面の錦。滿山の錦、滿山の焰、五色の焰、峰といはず、谷ともいはず、たゞ燃えに燃え立つ美觀、殆ど壯觀、小生も覺えず嗚呼と叫び申候。その黃色・淡黃色・褐色・黃褐色、その他思ふべくしていふべからず、見るべくして思ふべからざる、ありとあらゆる色美しき錦の地に、遙か彼方の岩の上に、朱の如き黃紅の楓一樹、此方の谷の底に鮮血の如き淺紅の枝一枝、かしこの松の隣に、夕燒の色よりも濃き深紅の兩三本、さながら一山を照らす炬火の如く、萬段の錦の色を一時に呼び覺し來るを見たる時には、小生はたゞ詩才のなきを恨み候。況や淺間時雨は全山に水洒ぎて去り、深碧の空は明鏡の如く上より照らし、今正に碓氷の西南に廻り來りし午日は、億萬條の金光線を惜しげもなく山に谷に漲らし下し候をや。

に「空山人ヲ見ズ。但人語ノ響ヲ聞ク。」と。
王維　唐の詩人。畫家、畫家。字は摩詰。
韋蘇州　唐の詩人。名は應物。
孟郊　中唐の詩人。字は東野。
京都三尾　高尾・栂尾・槇尾。共に京都郊外の紅葉の勝地。



スキー

この峰に山人の棲みわぶる家一つ二つ有之、小生その家の前を過ぎ候時、折しも野稲の收納に忙しき主人に向ひ、「紅葉が好いね。」といへば、「は、紅葉かね。」と申候。彼等は紅葉に包まれて生活するなれば、何の珍らしげもなく恐らく唯一度の歎美の辭をだに與ふることなく、白氏の風流を知らで、紅葉を焚きて茶を沸かし、朝夕の山の上り下りにも、あたら錦を踏み躙り、かくて、年々紅葉を迎へ、紅葉を送るにぞあらんずらん。

横川より一里と申す所に、力餅を賣る茶店これあり、同所に到れば碓氷の右側を通る舊道、中央を通る汽車道、左側を通る新道、皆一所に落ち合ひ、碓氷三里、紅葉の觀はこの所に終り候。

—(青蘆集)—

白氏の風流云々　白樂天(唐の詩人)の詩に曰く、「林間ニ酒ヲ煖メテ紅葉ヲ燒ク。」と

躙＝蹂

横川　群馬縣碓氷郡横川町。碓氷峠の東麓。

一八　スキー禮讃

木原　均

年を追うて冬を待佗びる人々の多くなつた事は喜ばしい。早春消行く雪を恨めしいと歎ずる人々のある事は嬉しい限である。

何故に、吾々は過去に於て、冬を陰慘な時期として、嫌惡しないまでも、喜ばなかつたか。是は凡べて吾々の南國式の生活樣式と、ウィンター-スポーツの缺如とによると考へてよからう。所が、スケートが行はれスキーが試みられるやうになつて、從來の消極的な冬の生活樣式の殼を打破つて、冬の寒さを利用し、冬にだけ惠まれる雪と氷とを利用する人が多くなつたことを禮讃したい。彼等は寒さに對して逃げ足

木原　均　明治二十六年東京府に生る。植物學者。理學博士。京都帝國大學教授。

ウインタースポーツ　冬期の運動競技。

を踏まない。之を研究し、寧ろ之を樂しまうとして居る。彼等とはウィンター・スポーツを爲す者の事である。

ウィンター・スポーツといふ言葉を使用すると、或る人々は直ちに富豪がサンモーリスあたりで恣に享樂する事を聯想するかも知れないが、それは其の極端な例である。片田舎の樵夫の子にも、都市の陋屋に住む小僧にも、此の樂しみは普及し得る。下駄の底に打付けた古鐵片ででもスケートの味が味はれるし、草鞋に

サン・モーリス　瑞西國にある夏・冬の行樂地。
挿繪　スキー場。

括り付けた木片ででもスキーの味に醉ふ事が出來る。また小さな塵取に乘つて橇の痛快味を味はふ子供等さへもある。

スキー禮讃者はスキーの形が既に美しいといふ。尖端の曲り工合などは特に美しいといふ。スキーの出來ない夏の盛りでも、時々スキーを取出しては愛撫する人も決して少なくない。スキーは木片ではあるが藝術品である。スキーに使はれて居る附屬具でも、決してスキーの美しさに劣りはしない。雪輪の付いたステッキ、鋲の打つてある重々しい靴、明るい色の襟卷やバンド、是等は何れも冬を明るくしようがための努力によつて成つたものに外ならないであらうが、それも嬉しいことの一つである。

併し、或人々をして、スキーが何よりも優つて居る、人生最大の快事であると言はせるのは、雪に掩はれた山野を、或は九十粁の速力で滑降し、或は又沈默の森に逍遙し、或は氷原の境に達し得るからではなからうか。勿論その技には巧拙はあるが、雪の上で轉がり通す事もやはり痛快なのである。或人が「往來で轉ぶと顏を顰めて後をも見ずにこそ〳〵と走つて行くが、スキーでこそ天眞爛漫に笑つて居られる。」といふ意味の話をした事がある。辷れて面白く、轉んでも面白いのである。

誰でもエレベーターで大なる速力を出して下らうが、それに快感は感じまい。併し、スキーのジャンプには是がある。誰でもエスカレーターに乘つて階下に下りても、痛快であ

るとは思ふまい。併し、スキーで斜面を辷る時にはそれが味ははれる。それは不安定さに打勝つがためである。子供等に取つては、滑臺からの直滑降は冒險であつて、其の成功は彼等を滿足させるに違ひないが、少し大きい少年に取つては不滿足である。彼等には最早それは冒險でないからである。スキーは隨つて其の不安定な半面に無上の快感が宿つて居るのである。終日の疲勞も一回の直滑降で癒されるのは是が爲である。轉倒する事が全然なかつたならば、それこそスキーはつまらないものではなからうか。

終りに競技のスキーに就いて一言を費して置きたい。スキーの競技はジャンプと長距離競走とであるが、興味の中心をなすものは何と云つてもジャンプである。實にジャン

プ競技は、スケートのアイスホッケーと竝んで、冬の競技の王位を占むべきものであらう。

ジャンプには美・大膽・安定の三條件が要求されて居る。四十米以上のジャンプになると、人間わざでないと思へるくらゐである。あの恐しい速力で深く落ちて行きながら、それでも平衡を失はずに飛んで行く姿を見て、私は人間の尊ぶべき存在である事に心を強く打たれた事が度々ある。其のくらゐジャンプは吾々をして襟を正させる。ジャンプは實にスキー競技中の花であるばかりでなく、有らゆる競技の中で最も勇敢壯快なものである。

挿繪　スキーのジャンプ。

アイス・ホッケー　氷上でするホッケー。一吋の厚さの平たい圓盤形のゴム製の球を用う。一チーム七人、

長距離競走は見物する點からいへば餘り面白味のあるものではないが、山を越え、谷を渡り、雪野原を遠く横切つて、十五粁乃至十八粁を走り通す事は、技術と忍耐力とを併せ有する者でなくては出來ない。況て耐久競走といつて、四十粁乃至六十粁の競走に至つては猶更の事である。茲に吾々は鈍重ではあるが、粘り強い雪國人の性格を見るのである。

冬の世界は近づいた。炬燵の中から、部屋のガラス戸から觀賞する銀世界ではなく、吾々の突入し活躍する舞臺となるべき雪の世界が近づいた。青く澄んだ空と輝いた太陽との下で、雪と氷との上で冬を樂しむ人々の上に幸あれ。

—(東京朝日新聞)—

一九　我が年中行事の自然味

上原敬二

我が國民性は、自然に對して愛着の念の深いものがあつた。汚れなき自然の淨境と精進の一路とは、共鳴する所が少なくなかつた。外國人が見て以て我が國民生活を謳歌するのも故あることと思ふ。

顧みて我々の日常生活が如何にあらゆる自然界の要素をとり入れて居るかに少しく注意を拂つて見たい。衣食住は言ふまでもなく、物の名・所の名・人の名・儀式・祭典、一つとして自然界に賴つてゐないことはない。

就中、年中行事の一々を仔細に觀察して見よう。

上原敬二　明治二十二年、東京市に生る。林學博士　東京高等造園學校長。

初春の松飾りは、松竹を門口に立て連ね、清淨の注連繩に裏白をあしらひ、福來の緣起を尙ぶ。床には鉢の內にも松竹梅を植ゑ飾り、元旦の祝ひ壽ぎに屠蘇の香をなつかしむ。雪の下萌えをたづねて人日の七草を味はひ、鄙びた歌に打ち興ずる。いつまでも春の氣持か、二十日正月を迎へてのち、漸く二月の節分に到り、柊のとげ〳〵しい葉に追儺の儀式をとり合はせ、これより立春と呼ばれて、氣も心も遽に陽春めいて來るのも嬉しい。水ぬるみ、蟄せる蟲も明るみへ出るであらう。初

注連繩―しめなは。

人日　陰曆正月七日の稱。この日、七草粥を食ふこと、古來の習俗である。

挿繪　新玉　英一蝶筆。

七草　春の七草。せり(芹)・なづな(薺)・ごぎやう(御行)・はこべら(蘩蔞)・ほとけのざ(佛座)・すゞな(菘)・すずしろ(蘿蔔)。

午の太鼓は、燃ゆるばかりの朱色の鳥居にうつろふ背景の緑の木立にこだまして、里神樂の氣持をまで誘ふやうである。

この月の末頃から、梅便りにそちこちしてゐるうちに、鶯餅だ、草餅だと、田の畦に薫る蓬の香、山里に摘む蕨の香が懐かしく、早既に上巳の節句も近づいて、上戸は桃の酒に、下戸は櫻餅に舌鼓打つ。子女ある家族は、今こそ我が天下とばかり、雛壇の前に陣取つて動かうともせず豆煎を頬ばる。

愈、年中行事の櫻狩り、花見の氣分は迫つて來た。堤には屋形の船を見下す一群も交つて、節面白く行樂の春を讃へて踊り狂ふ。渚には潮干の遊びに興深く、遠出の人達は郊外に逝く春を惜しみつゝ、花蔭に暮れ行く日脚を恨む者も多い。

一重を送つて八重を迎へる間もなく、新緑の天地は次第に近寄つて來る。

四月の初めは、灌佛會の祭に甘茶を青竹の手筒に受けた昔の行事が懐かしい。五月は葉櫻の月である。初夏の風にはた〳〵と飜る鯉幟の音も勇ましく聞える。夕べには菖蒲湯に溫みをとつて、柏餅や粽に腹ふくらすのも年中行事と思へば有難い。

今日この頃の曇の空はと思ふうち、いつかそれが五月雨の前兆となり、しと〳〵と降り出されては、身も魂も全く大

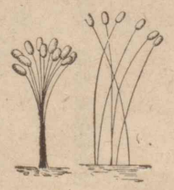
灌佛會　陰暦四月八日、即ち釋迦佛の降誕當日、その像に甘茶を灌く佛事。
甘茶　甘茶と稱する虎耳科の植物の莖葉を煎じた汁。

挿繪　灌佛（東都歳事記）

粽―ちまき

地に吸ひ寄せられる。蛇の目の傘に新緑の柳の絲がすれすれに煙るやうなお濠端の景も一しほと思はれるが、庭前の芭蕉に降りそゝぐ雨の音を聞きつゝ、打ち荒れた垣根の杙を滑つてゆく蝸牛の姿に見入るのも、この頃ならでは得られぬ小品的な景である。優曇華や、さては黴までを花と賞して、その緣起を擔いだのは、冷やかな科學の眼から見れば何の興趣も湧かないけれども、これも自然美化の一つと見られる。

梅雨氣分に飽き飽きしてゐるのも今のうちで、やがて炎熱の世界となり、或る夜頻りに雷鳴・電光が物凄かつたが、その翌日からは梅雨明けの前兆が見えて、そろ〳〵吹く風も蒸暑いやうに思はれて來た。



優曇華

鄙びた行事ではあるが、七夕の祝に青竹立てならべ、紫紅とりどりの色紙・短冊を小枝に結び、天上の二星をお祭りする。この頃はまた井戸替への時節である。赤飯炊いて戸板に載せ、井戸神樣をお祭りするといふ。登山もこの季節が絶好で、白衣の姿、清淨の鈴の音、過ぎし年の曾遊を思ひ浮かべて、山水が頻りに戀しい。はや今年も春は過ぎてしまつたのだ。

とう〳〵盂蘭盆が近づいた。新佛もないが、心ばかり墓前と靈前に供へてと、背戸の畑より、まだ無理と知りつゝも、初ちぎりの數々、茄子に枝豆に果物の品々、夕べは苧殼を燃やして、へら〳〵と立ちのぼる煙に精靈を迎へる。田舍では、今日では盛んな盆踊りに、鎭守の森は更闌くるまで村人の笑ひさゞめきに滿ち、曉の迫るのも知らぬ。

七夕。陰曆七月七日の星祭り。天上の二星　牽牛星（ひこぼし）と織女星（たなばたつめ）。

精靈―しようりよう

残暑なか〳〵去り難く、時折また今年も暴風雨に見舞はれはしないかと考へる。二百十日の前後より秋の氣分が日増しに濃くなつて來て、これが陰暦であれば、重陽の節句とて菊の酒を祝はねばならぬ。十月は月見の月である。澄みきつた夜の空は高く、拭き磨いた縁側に映る淡い光を頼りとして、刻々に上りゆく銀盆のやうな夕月に薄を立て、栗を供へ、團子を盛つて

重陽の節句　陰暦九月九日の節句。陽數の九が重る故にこの稱がある。

挿繪　歳の暮（東都歳事記）

自然讃美の一夕を過ごす。さうして居るうちにすぐ戎講となる。

月が替れば酉の市だ。福を掃き込む熊手の縁起に、大鳥神社は待ち構へた大入繁昌。唐の芋のごついのを女竹の小枝に貫き挿しにして家路をいそぐのも、柑子蜜柑の枝も撓わに實るのを肩にかざして、混み合ふ人の群を押し分けるのも、酉の市ならでは味はへぬ情景である。

いつの間にか師走となつた。一年の總勘定に頭なやます季節は來た。春を迎へる支度は、まづ歳の市から始まる。深川の八幡の市を口あけとして、次第に市中の盛り場に市を持ち廻る。そゝくさと買物に出入りする町家の内儀や、氣樂さうに春の遊びを考へる子供たちもやはり暮の景物である。

戎講　恵比須を祭ること。陰暦十月二十日、商家でこれを行ふ。

酉の市　「酉の町」ともいふ。毎年十一月の酉の日に、東京市内各所の大鳥神社で行はれる祭禮。

唐の芋　芋の一種。水田に植ゑる。

深川の八幡　富岡八幡神社東京市深川區富岡町にある。茲の歳の市は十二月十四・五日。

正月の用意の松飾り、歳暮贈答の鮭のつるし物、注連縄商ふ假小屋も出來れば、松竹を引き廻す勇み肌の氣さくな輕口も路地を洩れて來る。煤掃きに竹の枝葉がが さ〳〵と音する家の隣では、餅つきの賑やかな一幕、向う鉢巻で年を忘れよとばかり大はしやぎの暮の有樣。

さんざめきも、餅つきで一つ鳧(けり)がつく。これからは、おせちを煮るとか、家の拭き掃除だ。春の用意だ。それ、忘れたものもある。年始狀も合間(あひま)に書かねばならぬ。葉書を買ひに走り出す。まつたく幾ら體があつても足らぬ、それこそ猫の手まで借りたい忙しさ。除夜の鐘の音を聞いて、さても今年はこれで終るかと、過去一箇年の追憶に無限の感慨を胸に祕めて、逝く年を敬虔な心で送り、將に來らうとする歳を希望の念

おせち　御節。御節供の略。

祕＝秘

にて迎へる。

かうして經て來る我々の年中行事を具に考へたならば、如何に自然味に豐かで、趣味性に富んでゐるか、如何に人生と自然との間に深い提携のあるかが十分に知られることと思ふ。

―（風景雜記）―

（豐豐）

二〇 雪國の春

柳田國男

白狀をすれば、自分などは春永く冬暖かなる中國の海近くに生まれて、この稍狹隘な日本風に、安心し切つて居た一人である。本さへ讀んで居れば、次第次第に國民としての經驗は得られるやうに考へて見たこともあつた。記憶の霧霞の中からちら〳〵と見える昔の野山は、花と綠の葉が際限も無く連なつたもので、雪國の村に住む人が氣忙しなく送り迎へる野山の色とは殆ど似もつかぬものであつたことを、互に比べて見る折を持たなかつたばかりに、永く知らずに過ぎて居たのであつた。七千萬人の知識の中には、かういふ例がまだ幾らもあらうと思ふ。「故郷の春」と題して屢、描かれる我々の胸の繪は、自分などには眞先に、日のよく當る赤土の岡、小松まじりの躑躅の色、雲雀が子を育てる麥畠の陽炎、里の石垣の蒲公英や菫、神社の森の木の大懸りな藤の紫と、今日からあすへの堺目も際立たずに、いつの間にか花の色が淡くなり、樹蔭が多くなつて行く姿であつた。

この休息とも又退屈とも名づくべき春の暮の心持は、ただ旅行をして見ただけでは、恐らく北國の人たちには味はひ得られなかつたであらう。

雪國では、時としては暖國から移つて來た人達が、長い冬の雪の底の生活に飽き飽きして、何といふ目的もなしに、鍬を揮うて庭前の雪を掘り、土の色を見ようとしたといふ話もある。鳥などは食に飢ゑてゐる爲に、殊に簡單な方法で捕

柳田國男 明治八年姫路市に生る。文學者。東京帝國大學政治科出身。

へられる。二三日も降り續いた後の朝に、一尺か二尺の幅の黑い土の肌を出して置くと、何の餌も囮も無くて、それだけで鵯や鶫が下りて來る。大隅の佐多とか土佐の室戸とかの、南方の茂つた御崎山の林に群れて囀りかはして居たものが、僅かばかり飛び越えると、もうこんな國に來てしまふのである。

我々の祖先が、曾て南の海端に住み餘り、或は生活の闘爭に倦んで、今一段と安泰な居場所を覓める爲に、地續きなればこそ氣輕な決意を以て、流を傳ひ山坂を越えて、次第に北と東の平野に降りて來た最初には、同じ一つの島が斯程までに冬の長さを異にして居ようとは、豫期しなかつたに相違ない。幸にして地味は豐かに肥え、勞少なくして所得は元

鵯

鶫

佐多　佐多岬。大隅の南端に突出する。

室戸　室戸岬。高知縣安藝郡。土佐の東端で、太平洋に突出する。

覓ー貿。

の地に優り、山野の樂しみも夏は故郷よりも多く、妻子眷屬と共に居れば、再び窮屈な以前の群に還つて行かうといふ考も起らなかつたであらう。が、秋が慌たゞしく暮れ、春の來ることの遲いのには、定めて暫くの間は大きな迷惑をしたことと思ふ。

十和田などは、自分が訪ねて見た五月の末に、雪を分けて僅かに一本の山櫻が咲かうとして居た。越中の袴腰峠・黑部山の原始林の中では、共に六月初めの雨の日に、まだ融けきらぬ殘雪が塵を被つて、路の傍に堆く積もつて居た。舊三月の雛の節供には、桃の花は無くとも、田の泥が顏を出して居ると、奥の在所の村民が來て見てこれを羨んだ。春の彼岸の墓參りなどにも、心當りの雪を搔きのけて、僅かな窪みを作

十和田　十和田湖。秋田縣と青森縣の界にある。國立公園の一。

袴腰峠・黑部山　富山縣東礪波郡

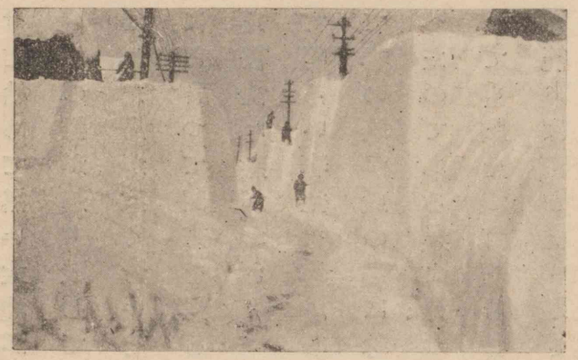
一　羨　羨ー うらやましがる

つて香華を供へて還るといふ話が、越後の南魚沼の町方でも語られて居た。あの世に往つて住む者にも淋しいであらうが、此の世同志の親類朋友の間でも、大抵の交通は春半ばまで猶豫せられ、他國に旅した者の歸つて來ぬことにきまつて居るのは勿論、相互に燈の火を望み得る程の近隣でも、無事に住んで居ることが確なる限は、訪ひ訪はれることが自然に稀である。峠の雙方の麓の宿場などが、雪に中斷せられて二つの嚢の底となることは、常からの片田舍よりも尙一層忍び難い淋しいものらしい。だから土地の人達は、銘々の家ばかりを、最も暖かく成るたけ明るくして暮さうと努力してゐる。親子兄妹が疎み合うては、三月・四月の冬籠りは出來ぬ故に、誰しも此の小さな天地の平和を大切にして、い

南魚沼　新潟縣南魚沼郡。

隣＝鄰

つかは必ず來る筈の春を靜かに待つてゐる。



斯ういふ生活が、寒い國の多くの村里では、略、人生の四分の一を占めて居たのである。それが男女の氣風と趣味・習性に大きな影響を與へぬ道理は無いのであるが、雪が降れば雪見などと稱して門を出でて山を望み、若しくは枯柳の風情を句にしようとする類の人々には、ちつとも分らぬ儘で今迄は過ぎて來たのである。

燕を春の神の使として歡迎する中部歐羅巴などの村人

挿繪　雪國の冬。

の心持は、似た境遇に育つた者で無いと解しにくい。雪が融けて始めて黑い大地が處々に現れると、すぐに色々の新しい歌の聲が起り、默して叢の中や枝の蔭ばかりを飛び跳ねてゐた鳥が、悉く皆いそいで空に騰がり、又は高い樹の頂上にとまつて四方を見るのだが、中でも今まで見かけなかつた輕快な燕が、わざ〳〵里近く翔け廻つて、幾度か我々をして明るい春空を仰がしめるのを、人は無邪氣なる論理を以て、春の綠が此の鳥に導かれて戻つて來るもののやうに考へたのである。「春よ還つて來たか。」の只一句は、何度繰り返されても胸を浪打たしむる詩であつた。嵐・吹雪の永い淋しい冬籠りは、ほと〳〵過ぎ去つた花の頃を忘れしめるばかりで、もしか今度は此の儘で世界を雪の谷底に閉ぢてしまふ

程ではあるまいかといふ樣な、小兒に近い不安を味はつて居た太古から、引續いて同じ鳥が同じ歡喜をもたらして居た故に、これを神とも幸運とも結び附けて、飛ぶ姿を木に刻み壁に畫き、寒い日の友と眺める習となつたのである。さうして是とよく似た心持は、亦日本の雪國にも普通であつた。

即ち此のやうにして漸くに迎へ得た新春の悅びは、南の人の優れた空想さへも超越する。例へば奥羽の處々の田舍では、碧く輝いた大空の下に、風は軟かく水の流れは音高く、家にはじつとして居られぬやうな日が少し續くと、ありとあらゆる庭の木が一齊に花を開き、その花盛が一どきに押寄せて來る。春の勞作は、この快い天地の中で始まるので、袖を垂れて遊ぶやうな日とては一日も無く、惜しいと感歎し

即＝即

て居る暇も無いうちに、艶麗な野山の姿は次第々々に成長して白くどんよりした薄霞の中に、桑は延び麥は熟し、やがて閑古鳥が頻りに啼いて、水田・苗代の支度を急がせる。この活き活きとした季節の運び、それと調子を合はせて行く人間の力には實は、中世のなつかしい移民史が匿れてゐた。その歴史を滲み透つて來た感じが人の心を溫めて、旅に在つては永く家郷を懷はしめ、家に居ては冬の日の夢を豐かにしたものであつたが、單に農人が文字の力を備ふことをしなかつたばかりに、その情懷は久しく深雪の下に埋もれて、未だ多くの同胞の間に流傳することを得なかつたのである。

—(雪國の春)—

艶＝艶
熟＝熟
溫＝温

二一 伊能忠敬

幸田露伴

忠敬歳十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして家をその子景敬に讓るまで、自ら抑へて平々凡々の人となり、一意專心たゞ伊能家の衰へたるを興し、己が任務を最も圓滿に最も美はしく果さん事を期しゐたりき。

凡そ才氣ある者の常として、己が欲せざることには一擧手一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲することにのみ身を委ねんとするは免れ難き習なり。たとひ己が欲せざることなりとも、その爲さざるべからざることなる以上は、甘んじてわが情を屈し、わが氣を抑へて、わが爲すべき事を爲すは、その人啻に才氣あるのみならず、亦實に德量ある人なりと

伊能忠敬 江戸時代の地理天文學者。上總國（千葉縣）に生れ下總國（千葉縣）香取郡佐原町伊能氏を嗣ぐ。文政四年（一八二一）歿、年七十七。

幸田露伴 慶應三年東京に生る。名は成行、文學博士、文學者。

いふべし。世に才氣ある人は多し。才氣ありて德量ある人は少し。年少くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刃の肉薄きが如し。物を截ることはよくすべし、折るゝ恐は免るべからず。されば世の奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢する例は數へも盡くし難し。忠敬が算數曆術の學を嗜み、且これをよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、「伊能氏を嗣ぎたる上は伊能氏を榮えしむべし。」といふを唯一の希望として、三十餘年一日の如く只管その家業に丹誠したるが如きは、實に德量の大なるを見るべきなり。

挿繪　伊能忠敬。

かくの如くにして伊能氏は興りぬ。景敬は家を嗣ぎぬ。一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は是に於て圓滿に果たされたりといふべし。

忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠敬の自由に用うることを得べし。この時は忠敬年既に五十歳、常人にありてはもはや老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歳の時も前途多望なる青年の春なり。爲すある人には、如何なる場合もわが力を試むべき所なり。忠敬は常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當りて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。後の爲すあらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて身の將に老いんとするを歎ずることなかれ。

さる程に、忠敬はその鄕里佐原を出でて、飄然として江戸に到り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一樣に笈を負ひて鄕關を出で、都門に遊びて師を尋ね學に就くところの書生と異なるところは、たゞその若きと老いたるとの差のみ、かくして忠敬は身を己が好める學に委したるが、己が滿足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。をりから幕府には曆法改正の擧ありて、これがため特に大阪より高橋作左衞門といふ者を召されたり。作左衞門、東岡と號す、算數・曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、その學の深きに服して、直ちに師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歲にして、東岡は三十二歲なりき。普通の人情にては、己より年若き人に會ひては、假令

曆法改正　寛政十年（二四五八）從來の曆法を改正せり。

高橋作左衞門　名は至時、字は子春、號は東岡又は梅軒。文化元年（二四六四）歿、年四十一。

己が學業などその人に及ばずとも、猶强ひて自ら高ぶり、敢へて頭を下げざるが習なれども、德量ある忠敬は、いかでか眞に敬ふべき學識ある人に向ひて拜伏するを厭ふべき。喜びてそれが門下生となれり。然れども同門の學生等は、師たる東岡の若くして弟子たる忠敬の老いたるをば、屢笑柄となしたりと云ふ。

晩學の難きは、實に何れの世にありてもかゝる事實の存するがためなり。是を以て非凡の士にあらざれば大抵自ら恥ぢて、師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱きて墓穴に入るに至るなり。本來の上よりいへば、老いて學ぶはたま〳〵その志の淺からざるを顯すのみ。また何の不可かあらん、況やまた何の恥づべきところかあらん。思ふに、

區々たる群小の嘲笑も、忠敬に於てはたゞ蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしなるべきのみ。かゝれば、忠敬と同門學生との優劣勝敗は、比較するまでもなく明かなることなり。忠敬の學術は、さながら堤防の決潰して洪水の押寄するが如き勢を以て歩を進め、終にその學の蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべきものなきに至れり。

かくて忠敬が、始めて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を實地に運用する機に際したるは、實にその年五十五歳の時なりき。五十五歳といへば、人は頽

挿繪　伊能忠敬筆　沿海日記。

齢用ふるに堪へずとする年齢なり。されど、忠敬は氣力旺盛、さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて喜色滿面に溢れ、即日にも出發せんとする勢ありきといふ。忠敬が、事に當りて勇往直前、險阻に屈せず風濤に辟易せず、遂にその志すところを完成したりしは、一にこの元氣勃々として燃ゆるが如き熱心を胸裏に藏めたるによれるなり。誰か日本人を早熟早老の人種なりといふ、是、豈我に伊能忠敬あるを知らざるものにあらずや。

—（露伴叢書）—

二二 かんにん

柳澤淇園

或人、文盲なるものを意見して、「世の交は他のことはいらず、たゞ堪忍の二字をよく守るべし。」といへば、文盲の人は頭を傾け、「カンニンとは四字にてはべらずや。」と、指をもて數へ、「御許には思しちがひなるべし。カンニンと、四字にてはべり。」といへば、意見せし人いはく、「愚昧の人かな。堪忍とは、タヘシノブと讀みて、二字なり。」といへば、また頭を傾け、「タヘシノブならば、また一字殖えたり。五字となりぬべし。何と仰ありとも、我等は四字と思ひはべれば、四字にてカンニンはいたしはべるなり。」といへるに、その人又いはく、「汝の如き愚昧の文盲は、實に諭しがたし。人に似て蟲同様なり。おのれがまゝにすべし。」と大いに憤りければ、文盲の人笑ひて、「何とも仰せあるべし。我等はカンニンの四字を知りはべれば、惡口せられても、少しも腹立ちはべらざるなり。」とて笑ひきとぞ。

余が友としける平澤何某といふ士は、堪忍づよき人にして、或時主用ありて、人多く具して行きける道のほどにて、二階より齒磨をつかひて吐きたる唾の、過ちて平澤が着せし上下にしたゝかにかゝりたれば、供人大いに憤り、その家に入り唾を吐きかけたるものを引出さんとす。平澤とゞめて、しばしこの家を借るべしとて、その家に入りて、挾箱より着替の上下を取出して着替へけるに、その家のものども大勢出でて詫ぶるにぞ、平澤申しけるは、「過なるべし。重ねて心を

柳澤淇園 名は里恭。大和國郡山藩の重臣。文武の才に富む。寶暦八年（一三六六）歿、年五十三。

挾箱 昔衣服、又は用具を納れて棒を通して僕に擔はせて行つた箱。

詫＝詫

つくべし。」とて出で行きぬ。供人いひけるは、「いかでそのまゝに赦し置き給へるぞ。」といへば、「けふは大切なる主用なり。かかる些細のことにひま取るべきにあらず。我が常に守れる堪忍はこのことなり。」といへり。その後また私用ありて、その供人を引連れ出でけるに、をりしも夏の頃、溝のけがれ水を打ちけるが、平澤が袴の裾より下をけがせり。またまた供人大いに憤り、すでに打擲にも及ばんとせしを、おし止めて行きければ、供人申しけるは、「いふがひなきことにて候。」といふに、「さにはあらず。けふは私用にて出でたり。私に人を罵ること、士たるものの本意にたがへり。たゞ堪忍だにせば、世に恥辱といふこともあるべからず。」といはれきとぞ。

—（雲萍雜志）—

恥＝恥

雲萍雜志　四卷。柳澤淇園の著。「見聞漫錄」（二十卷）中から採錄補訂したもの。

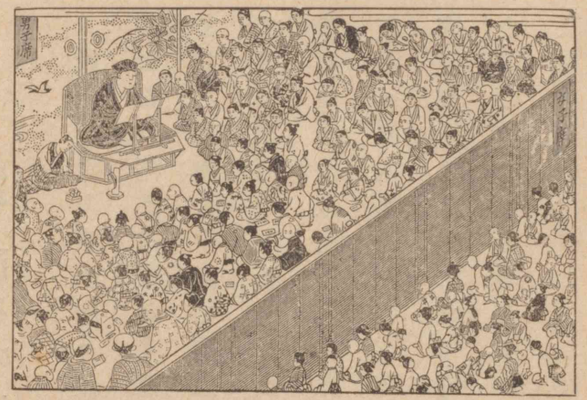
二三　己をかへり見よ

柴田鳩翁

或山家より、京の町へ談義僧を招待に參りました。折ふし其の日は雨ふりで道も惡いので、駕籠をもつてむかひに來ました。和尚もやがて用意して駕籠にうちのり、京をはなれて三四里ばかりと思ふ所で、どうした事か駕籠の底がぬけました。いたはしや、和尚は袈裟も衣もどろまぶれになられた。迎への人足も氣のどくがり、そこらかけまはつて繩ぎれ多くひろひきたつて、やう〳〵と駕籠をからげ、扨和尚に「ふたゝび御乘りなされ。」といふ。和尚も氣味わるけれど、雨はつよし、袈裟・衣は汚れる、晝中にあるくも外聞惡く、ふしようぶしようにて駕籠にのるとき、「これ駕籠の衆、もう底はぬけはし

柴田鳩翁　名は亨。京都の人。心學者。天保十年（一四九九）歿、年五十七。心學とは、江戸時代に行はれた一種の精神修養學。談義僧　說教僧。

まいか。「いえ〳〵、氣づかひはござりませぬ。」といふ。乘移る、舁上げるの拍子で、又底がめき〳〵といふ。和尚大きに肝を潰し、「これでは中々安心がならぬ。御苦勞ながら、合羽の上からいま一度丈夫に繩がらみして下され。」といはる。人足も尤もに思ひ、また繩ぎれを拾ひあつめ、合羽の上を竪横十文字にからげ、これではあやまちはござるまいと、道をいそいである村を通りかゝつた。折ふし此の村に法談があつたとみえ、參詣の老若、道場の歸りあしに此



合羽―かつぱ
挿繪　心學講話の席

の駕籠を見付けて、肩衣をかけたる親仁が、かたはらのうば・かゝにいふには、「なんと皆の衆、今日の御勸化はありがたいことではござらぬか。いかさま無常迅速の世の中、生者必滅會者定離のことわり、何どき如來樣のお迎へがあらうやらしれぬが、人の身の上。あれあの駕籠を見さつしやれ。どうでも京へ奉公に往つた人が死んだと見えて、死骸を在所へつれていぬると見える。さても、儚いものぢやござらぬか。」といふ聲を、駕籠に乘りたる和尚が聞きつけ、さては我を死人と心得たか、忌々しいと、わざと駕籠の中で咳拂ひをすると、かの老人は此の咳拂ひに驚き、急にかたはらへ飛びのき、小聲になつて、「死人ぢやと思うたらどうでも科人ぢやさうな。めつたに側へ寄るまいぞ。」といふ。和尚愈腹を立て、今はたまり

生者必滅云々　佛教の語。
如來　阿彌陀如來。西方極樂淨土の主。
(一)忌忘

かねて駕籠の中でぢだんだふみ、大聲をあげて、「科人ではをりない。」といふ。其の聲に又びつくりして、「さては科人ではなうて、どうでも氣違ひぢやさうな。」といはれた。

これが面白いはなしぢや。何分駕籠を外から繩がらみにしたもの故、誰にみせても死人ぢや。然るに中から物をいへば、科人といふもことわり、又氣ちがひぢやさうなといふのも、外からこじつけていふのではない。皆此の方に其のすがたの模樣があるによつてぢや。これでよう御合點をなさりませ。よいものをわるいとは人はいはぬ。何事もかへりみるのが肝心ぢや。ある人の道歌に、

世の中は何もいはずにいよすだれ
其のよしあしは人に見えすく　―（鳩翁道話）―

二四　月雪花

芳賀矢一

煌々たる活動の日の光、西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照らす。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、群蔭皆影を伏して、大小の有象・無象悉く照破される光景であるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤・貧富の分別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である。炎熱を伴なはない清涼の光である。皎潔・無垢・崇美と稱ふべきやさしい光である。休息安靜の夜には最もふさはしい此の光に對しては、誰しも人生の慰藉を感ずる。詩的情緒は油然として湧く。晝の間は猛獸

一貧　一貪　一藉　一籍

芳賀矢一　國文學者。福井市の人。昭和二年歿、年六十一。

と闘つて居る熱帶の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照らす月光の、人心の胸懷に沁みわたることは、恰もその影の千草の露の玉毎に宿るやうなものである。「うち向ふ月は一つの影ながら浮かぶは千々の思なりけり」である。

東西古今、喜悲・苦悶の情熱は幾萬回となく、幾億回となく、此の光に向つて愬へられた。之を嗟嘆し、之を吟咏した詩歌の感吟

闘＝鬪

うちむかふ月は　荷田蒼生子の詠。蒼生子は春滿の妹。夫の歿後は江戸に出で懷ひを風月に寄せた。その教を乞ふものが多い。天明六年（一七八六）歿、年六十五。

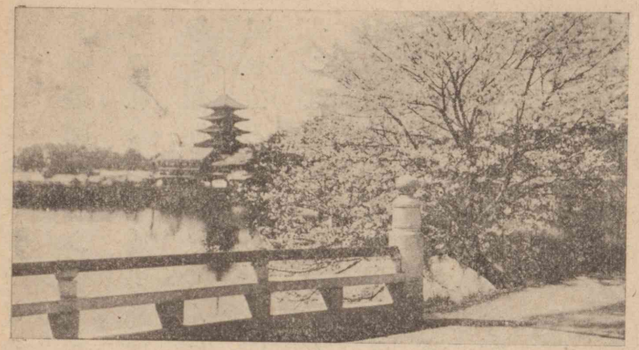
は世界各國の言語に充ち滿ちて居る。天文學者は曰ふ、「月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。」と。此の冷たい光が古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか。又現に與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。

雪は月よりも一層冷たい。貧富・貴賤の差別なく、その純潔な色をもつて乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓・茅屋もみな同じ色に埋められる。「げにや花ならば咲かぬ梢もまじりなん。なべて降りにし白雪の。」といげにや花ならば　「花ならば咲かぬ梢もまじらましなべて雪ふるみ吉野の山」（新續古今集、僧仙覺）

ふやうに、眼に入る者、すべて其の下に包まれてしまふ。「三千世界銀成色、十二樓臺玉作層。」の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來る此の純白の色にくらべては、地上の花も甚しく汚ぐ感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、唯一條の川水を殘して、山といはず、野といはず、瞬く中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花、紅葉色々の眺は元より美しいに相違ない。花の散つた後の新綠の色も、目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉も無い冬枯の時に、地上の萬物が此の銀色に蔽はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を悉した

三千世界云々　宋の僧劉師道の句である。宇宙は銀色となり、仙境の十二樓の如く忽ち白玉樓臺を顯出するをいふ。廣寒宮　月の都。

唯一條の川水　凡兆の句に「長々と川一筋や雪の原」



ものではないか。一年中蓮の花の開いて居る極樂淨土は、決して我等の世界程樂しいものでは無い。

雪に埋もれた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさま〳〵、どれを見ても美しいのが四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は其の美しい色の外に、芳しい匂さへ有つて居る。我等の食用のために

作つた菜や大根や、どの花でも無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花の價を生じたのは無理はないが、山の花、野の花いづれも月や雪と同じやうに、一文錢を要せぬのである。人世に花なくんば、どれほど寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、其の濫用を愼んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。月・雪の眺は其の皎潔を愛し、其の清淨を貴ぶが、花は其の艶麗・華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ・花やか・花々しい・華美・華麗・華奢等の話は、皆花に基づいたものである。今古東西の詩歌は擧げるだけ愚かである。余は唯「花をし見れば物思もなし」といふ古歌を以てすべてを總括し得べしと信

花をし見れば「年ふれば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物思もなし」（古今集、藤原良房）

ずる。

月・雪・花三つの眺は、各其の特長がある。いづれを先、いづれを後といふことが出來ぬ。

山ざくら花の下風吹きにけり
　木のもとごとの雪のむらぎえ

これは花を雪に譬へたのである。

冬ながら空より花の散りくるは
　雲のあなたは春にやあるらむ

これは雪を花に譬へたのである。

笠は重し、吳山の雪。鞋は香ばし、楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とに譬へたのである。花を賞して月を愛

山ざくらの歌　康資王の母の詠。（新古今集）

冬ながらの歌　清原深養父の詠。（古今集）

笠は重し　謠曲「葛城」の句。

せぬ人は無い。月・花を愛して雪を賞でぬ人も無い。

思へ、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖されてゐる北極に近い地では、氷は即ち人の家である。此の地方の人は寸紅の目を樂しませるものは無い。又これに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀は見た事がない。瓦斯・電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華な倫敦の住民も、秋・冬の半年は美しい月の光を見ることが出來ない。我等日本人が昔も今も此の三つの眺を恣にすることを得るのは、眞に天賦の幸福ではあるまいか。

月・雪・花の眺は古人の歷史が加つて一層の感興が增す。「世世を經てながめし人の數にまた我をもゆるせ秋の夜の月。」

倫敦　イギリスの首府。霧が深くて、一年の半分は月の光を仰ぐことが出來ない。

世々を經ての歌　伊藤仁齋の詠。

月は古來の歷史を照らす鏡である。「年々歲々花相似、歲々年年人不同。」「白頭縱作花園主、醉折花枝是別人。」鬢の霜、頭の雪、人生の感は花を見て益繁く、雪を見ていよ〳〵多い。二千五百年以來、月・雪・花三つの眺を有し得たる我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に傳へたるよ。如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。

—（月雪花）—

青海原さしもみちくる潮さゐは月の御舟やうかべそむらん

（荷田春滿）

てる月のかげの散りくる心地して夜ゆくそでにたまる雪かな

（香川景樹）

花はたゞ霞み渡れるたえまよりしらみ初めたるあけぼのゝいろ

（小澤蘆庵）

年々歲々云々　唐の劉廷芝の「白頭ヲ悲シム翁ニ代ル」と題する詩中の句。白頭云々　唐の雍陶の詩の句。

荷田春滿　第一課參照。

香川景樹　歌人、鳥取の人、天保十四年（一八四三）歿、年七十六。

小澤蘆庵　歌人、尾張の人。享和元年（一八〇一）歿、年七十九。

二五　文章の道

島崎藤村

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には經驗のなかつた私も、漸く岸を離れることが出來るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通ふうちに向うの河岸まで泳ぎ越すことが出來た。更にまた一夏泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んで居た頃に、よくも分らなかつた水瀨の速い遲いもわかつて來たし、眞水と潮流の混り合つたあの川の中の冷たいと溫いともわかつて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を、泳ぎながらに見ることも出來た。板子なしには溺れる外はなかつた私も、二夏の末には優に隅田川

島崎藤村　名は春樹。明治五年長野縣に生る。文學者。詩人。

隅田川　東京の東部を貫き東京灣に注ぐ。流域二百八十粁餘。河幅の最廣所は二百四十餘米。

を往復した。私は普通の泳ぎ手が行けるところ迄は、自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなか〳〵容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出來る人を見たり、拔手の上手な人などを見た時は、全く感嘆してしまつた。文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして根氣さへあれば、そこまで行くことは決して難くないに相違ない。

信州の小諸に居た頃、私は弓をやつたことがある。誰でも最初のうちは、的に向つて矢を當てることばかりを心掛ける。唯當りさへすればよい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひもよらぬ場所へ飛んで行く。射手の心に賴むところもなく、矢の曲直を辨別

小諸　長野縣北佐久郡の町

する力もなく、さうして幸に當つた矢は高慢な煩はしい熟練を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得のある老人が私達の矢場へ來た。その老人が先づ姿勢を正すことを私達に教へてくれた。それからの私達の矢は、たとひ的を貫くことが出來ないやうな場合でも、一手揃ひで同じ場所を行くやうになつた。これは文章の道にも當嵌めて見ることが出來る。たゞ好い文章をのみ作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふものは、どうしても先づ自己から正してかゝらねばならない。

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鍬を執つたことがある。讀書のかたはら、よくその鍬をかついで行つて土を耕し

一手揃ひ　二本の矢が同じやうに射られること。矢二本を「一手」といふ。

て見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘返すことから始めた。土を碎いた。小石を擇り分けた。地ならしをした。汗を流してそれらの仕事をした。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植ゑ易いものから作つて見た。その畠には、大根・白菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、サクをかけに行つた。馬鈴薯の花が白く盛りな頃に行つて、試みに土の中を探つて見ると、はや圓いのが幾つも〳〵根元の方から出て來た。豌豆の蔓は長く延びて、人の背よりも高く絡みついた。畠の中には、嫩く育つたのを摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の百姓の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の

サク　鍬で畠を打ちかへすこと。さくり。

苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私はある畠を通つて、非常に嚴肅な念に打たれたことを、今でもよく思ひ出すことが出來る。われ〳〵が文章の手本とすべきものは、何程われ〳〵の周圍にあつても、それを悟らないことには仕方がない。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならない。「試みる」といふことは、「悟る」といふことの初である。

淺草の新片町に住んだ頃、家は淺草橋や兩國橋に近くて、私はあの隅田川の界隈を漕ぎ廻つたことがある。最初のうちは無暗に手足を動かし、あの長さ一丈ばかりもある艪を前へ押し、手許に引きして骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。次第に私は手足を動かすことが少くて、身體全體の力で、ゆつくりと艪を押すことが出來るやうになつた。向うから大きな傳馬がやつて來たぞ、あれに一つ衝突しないやうにと、さう思つて漕いで行く樂みなどもそれから起つて來た。その後船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには力の省略がある、簡素の美がある。文章の道にも、無暗に筆を弄することが決して自己の眞の表白とはならない。

眞に好い文章には眞に好い結晶の力がある。

—（飯倉だより）—

淺草の新片町　東京市淺草區の東南部。現在同區柳橋に含まる。
淺草橋　神田川（隅田川に注ぐ）に架す。
兩國橋　隅田川に架す。

新制中等新國文 卷四 終

字音假名遣一覽

（本表は記憶の便宜上少數の漢字音假名遣を擧げ、他は之を類推せしむる。漢音・呉音は別に區別せず、但し兩音に關係せる必要語は各別に掲出した。類形の漢字は記憶の必要上同列に之を掲げ、一覽に便した。）

イ

ゐ
尉・慰・韋・偉・緯・煒・違・圍・葦・闈・蝟・唯・維・帷・惟・委・倭・倭・痿・透・萎・胃・渭・謂・蝟・爲・位・威・畏・彙・遺・域・閾・員・韻・隕・殞・尹・允・院・筠

ゐき
ゐん

此ノ外ハ大抵**い**ノ假名。

エ

ゑ
ゑい
ゑつ
ゑん
會・繪・回・廻・畫・穢・惠・慧・衞・衞・越・鉞・粤・曰・袁・猿・遠・轅・園・怨・宛・苑・婉・鴛・蜿・爰・媛・援・猨・瑗・垣・圓・寃

此ノ外ハ大抵**え**ノ假名。

え
えう
えふ
よう
徭・搖・謠・遙・瑤・鷂・要・腰・曜・耀・耀・夭・妖・殀・幼・拗・窈・杳・葉・用・俑・涌・蛹・踊・容・蓉・溶・熔・鎔・庸・佛・髏・膺・鷹・擁・甕・癰・孕・蠅

此ノ外ハ大抵**やう**ノ假名。

オ

を
をく
をつ
をん
屋・烏・鳴・塢・惡・汚・越・膃・溫・慍・蘊・袁・園・遠・怨・苑・寃・穩

此ノ外ハ大抵**お**ノ假名。

あふ
おう
わう
押・狎・鴨・凹・應・鷹・嘔・毆・歐・嫗・謳・鷗・甌・翁・蓊・甕・王・往・枉・汪・旺・尪・皇・凰・黄・横

此ノ外ハ大抵**あう**ノ假名。

カ

くわ
化・花・貨・訛・靴・禾・和・科・果・菓・課・夥・裹・顆・窠・華・嘩・譁・禍・蝸・過・渦・鈎・火・戈・瓜・寡・瓦・臥・畫

ぐわ
くわい
會・繪・檜・膾・獪・鱠・回・徊・蛔・廻・傀・槐・魁・瑰・塊・鬼・悔・晦・誨・灰・恢・襃・快・怪・貫・乖

コ

かふ
恰・洽・閤・甲・匣・狎・胛・岬・盍・溘・嗑・闔

がふ
こう
合・孔・吼・亙・恆・口・扣・叩・后・垢・逅・詬・苟・拘・鉤・溝・構・搆・購・媾・篝・遘・工・紅・虹・訌・功・攻・貢・槓・鴻・倥・控・侯・候・喉・猴・洪・哄・閧・後・弘・寇・厚・公・興・毫・肱・肯・恒・劫・業・光・恍・晃・胱・航・皇・惶・徨・煌・篁・蝗・遑・黄・廣・曠・礦・鑛・壙・鬢・荒・慌・宏・紘・轟

ごふ
くわう
ぐわう

此ノ外ハ大抵**かう**（**がう**）ノ假名。

サ（ゴ）

シ（ジ）

しふ
楫・輯・緝・葺・習・摺・集・拾・襲・執・澁・濕

じふ
しゅう
じゅう
十・什・汁・終・衆・宗・從・縱・蹤・充・銃・戎・絨

ぢゅう
重・住・頭（**ぢゅう**ハ**ぢう**ト書クモ妨ナシ）

しう
小・少・抄・鈔・肖・梢・宵・霄・消・稍・硝・逍・銷・誚・哨・蛸・召・昭・照・詔・韶・沼・招・紹・蕭・簫・嘯・瀟・焦・蕉・憔・樵・礁・笑・燒・椒・繞・饒・遶・擾・捷・睫・妾・接・渉・懾・慴・丞・蒸・拯・乘・剩・冗・繩・茸・昇・陞・從・慫・縱・蹤・聳・悚・竦・誦・證・稱・勝・承・丈・仗・杖・孃・釀・定・錠・場・娘・溺・嫋・條・尿・帖・疊

せう
せふ
しよう

此ノ外ハ大抵**しう**（**じう**）ノ假名。

じよう
ぢやう
てう
でふ

此ノ外ハ大抵**しゃう**（**じゃう**）ノ假名。

ち
持・痔・峙・治・地・尼・怩・除

タ（ド）

たふ
とう
どう
答・塔・搭・沓・踏・納・衲・榻・東・棟・凍・豆・逗・頭・闘・痘・登・澄・鐙・磴・劃・多・疼・擊・藤・籐・謄・騰・等・投・偸・透・桶・統・童・僮・撞・瞳・瞳・同・洞・桐・胴・銅・筒・動・慟

此ノ外ハ大抵**たう**（**だう**）ノ假名。

ナ

にふ
にゅう
入・乳（**にゅう**ハ**にう**ト書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵**にう**ノ假名。

ねう
にょう
ねふ
饒・撓・遶・尿・溺・女・捻

此ノ外ハ大抵**にゃう**ノ假名。

ノ

なふ
のう
納・衲・農・濃・膿・能

此ノ外ハ大抵**なう**ノ假名。

ヒ（ビ）

へう
表・俵・票・標・漂・嫖・飄・飄・剽・猋・飄・豹・苧・苗・描・猫・錨・秒・眇・渺・廟・馮・憑・冰

此ノ外ハ大抵**ひやう**（**びやう**）ノ假名。

ホ（ボ）

はふ
ほふ
ばふ
ぼふ
ほう
ぼう
法・乏（漢音）・法・乏（呉音）・乏（漢音）・法・乏（呉音）・奉・俸・捧・丰・蜂・峯・逢・烽・蜂・鋒・縫・蓬・朋・崩・鵬・繃・封・幇・豐・鳳・矛・袤・某・謀・寶・眸・棒

此ノ外ハ大抵**はう**（**ばう**）ノ假名。

メ

めう
苗・猫・妙

此ノ外ハ大抵**みやう**ノ假名。

字音假名遣一覽

（本表は記憶の便宜上少數の漢字音假名遣を擧げ、他は之を類推せしむる。漢音・吳音は別に區別せず、但し兩音に關係せる必要語は各別に掲出した。吳音は別に掲げ、一覽に便した。類形の漢字は記憶の必要上同列に之を掲げ、一覽に便した。）

イ

ゐ
ゐき
ゐん

尉慰韋偉緯煒違圍葦闈
幃唯維帷惟委倭餧痿透
萎胃渭謂蝟爲位威畏彙
遺
域閾
員韻隕殞尹允院筠

此ノ外ハ大抵いノ假名。

エ

ゑ
ゑい
ゑつ
ゑん

會繪囘廻畫穢惠慧衞
衞越鉞粤白
袁猿遠轅園怨宛苑婉鴛
蜿爰媛援猨瑗垣圓寃

此ノ外ハ大抵えノ假名。

え
えふ
よう

徭搖謠遙瑤鰩要腰曜耀
耀夭妖殀幼拗窈杳
葉
用俑涌蛹踊容蓉溶熔鎔
庸佛牖膺鷹擁甕癰孕蛹

此ノ外ハ大抵やうノ假名。

オ

を
をく
をつ
をん

烏嗚塢惡汚
屋
越膃
溫慍薀袁園遠怨苑寃穩

此ノ外ハ大抵おノ假名。

あふ
おう
わう

押狎鴨凹
蓊甕
王往枉汪旺尪皇凰黃横

此ノ外ハ大抵あうノ假名。

カ（ガ）

くわ
ぐわ
くわい
ぐわい
くわく
ぐわく
くわつ
ぐわつ
くわん
ぐわん

化花貨訛靴禾和科果菓
課夥裹顆窠華嘩譁禍蝸
過渦卦火戈瓜寡
瓦臥畫
會繪檜膾獪鱠囘徊蛔廻
傀槐魁瑰塊嵬悔晦誨灰
恢詼懷壞快怪潰乖
外
畫劃郭廓獲穫蠖鑊擴攫
霍藿擴馘
活刮括闊聒滑猾豁
月
串患綬浸完莞筦貫慣官
宦管菅棺逭館喚換煥渙
環還寰圜鐶勸灌歡觀鸛
讙權驩鑵濟寬桓款冠卷
盥關鰥
丸紈元玩頑顧

此ノ外ハ大抵か(が)ノ假名。

キ

きふ
きゅう

及吸汲級笈岌給翕泣急
弓穹躬窮宮(きゅうハきうト書クモ妨ナシ)

此ノ外ハ大抵きうノ假名。

ケ（ゲ）

けう
げう
けふ
げふ
きよう
ぎよう

喬僑橋嬌驕徼竅梟教
叫
堯僥澆曉驍翹
夾俠挾狹峽頰鋏篋愜莢
怯劫協脇脅
業鄴
共供拱恭龔恐蛩跫鞏凶
兇匈恟胸興矜兢
凝

此ノ外ハ大抵きやう(ぎやう)ノ假名。

コ（ゴ）

かふ
がふ
こう
ごう
くわう
ぐわう

恰洽閤甲匣狎胛岬盍溘
嗑闔
合
孔吼亙恆口扣叩后垢逅
訴苟拘鉤溝構搆購媾篝
遘工紅虹訌功攻貢槓鴻
倥控侯候喉猴洪哄閧後
弘寇厚公與蕊肱肯恒
劫業
光恍晃胱觥皇惶徨煌篁
蝗遑黃廣曠礦鑛壙黌荒
慌宏紘
轟

此ノ外ハ大抵かう(がう)ノ假名。

シ（ジ）

しふ
じふ
しゅう
じゅう

楫輯緝葺習摺集拾襲執
澁濕
十什汁
終衆宗
從縱蹤充銃戎絨
(しゅう(じゅう)ハ(しう・じうト書クモ妨ナシ)

ぢゆう

重住頭(ぢゆうハぢうト書クモ妨ナシ)

此ノ外ハ大抵しう(じう)ノ假名。

せう

小少抄鈔肖梢宵霄消稍
硝逍銷誚哨蛸召昭照詔
韶沼招紹蕭簫嘯瀟焦蕉
憔樵礁笑燒椒
繞饒遶擾
捷睫妾接涉懾慴
松訟頌鬆鐘衝踵燻腫升
昇陞從慫縱蹤聳悚竦誦
證稱勝承
丞蒸拯乘剩宄繩茸
丈仗杖孃釀定錠場娘
溺嫋條尿
帖疊

じよう
ぢやう
てう
でふ

此ノ外ハ大抵しやう(じやう)ノ假名。

ぜう
せふ
しよう

繞饒遶擾
捷睫妾接涉懾慴
松訟頌鬆鐘衝踵燻腫升
昇陞從慫縱蹤聳悚竦誦
證稱勝承
丞蒸拯乘剩宄繩茸
丈仗杖孃釀定錠場娘
溺嫋條尿
帖疊

ぢき
ぢく
ぢつ
ぢよ
ぢん

持痔峙治地尼怩除
直
軸舳竺竗恤
昵
女除
陣塵

此ノ外ハ大抵じノ假名。

ズ

づ

豆逗頭圖途徒

此ノ外ハ大抵ずノ假名。

ソ（ゾ）

さふ
ざふ
そう

挿匝
雜
窗總聰忽葱偬宗綜踪淙
崇曾僧增層憎贈奏湊輳
叟搜艘搜嗽漱嗽簇宋走
叢藪送

此ノ外ハ大抵さう(ざう)ノ假名。

チ

ちふ
ちゆう

蟄
中仲冲忠衷注柱註駐誅
蛛厨踊蟲(ちゆうハちうト書クモ妨ナシ)

此ノ外ハ大抵ちうノ假名。

てふ
てう

蝶喋牒諜渫帖貼
朝潮嘲兆銚挑眺跳窕鳥
凋調彫鯛超迢貂髫弔鳥
釣肇糶趙
冢塚徵懲重澄寵

ちよう

此ノ外ハ大抵ちやうノ假名。

ト（ド）

たふ
とう
どう

答塔搭沓踏納衲榻
東棟凍豆逗頭鬪痘登蹬
鐙磴剄冬疼撞藤籐謄騰
等投偸透桶統
童僮撞瞳朦同洞桐胴銅
筒動慟

此ノ外ハ大抵たう(だう)ノ假名。

ニ

にふ
にゆう

入
乳(にゆうハにうト書クモ妨ナシ)

此ノ外ハ大抵にうノ假名。

ねう
によう
ねふ

饒撓遶尿溺
女
捻

此ノ外ハ大抵にやうノ假名。

ノ

なふ
のう

納衲
農濃儂膿能

此ノ外ハ大抵なうノ假名。

ヒ（ビ）

へう
べう
ひよう

表俵票標漂嫖飄飄剽猋
飃豹孥
苗描猫錨秒眇渺廟
馮憑冰

此ノ外ハ大抵ひやう(びやう)ノ假名。

ホ（ボ）

はふ
ほふ
ばふ
ぼふ
ほう

法乏(漢音)
法・乏(吳音)
乏(漢音)
法乏(吳音)
奉俸捧丰蚌峯逢烽蜂鋒
縫蓬朋崩鵬繃封幇豐鳳
矛袤某謀貿眸棒

ぼう

此ノ外ハ大抵ほう(ぼう)ノ假名。

メ

めう

苗猫妙

此ノ外ハ大抵みやうノ假名。

モ

もう

蒙朦濛艨

此ノ外ハ大抵まうノ假名。

ユ

いふ
ゆう

邑悒揖
雄勇熊裕融

此ノ外ハ大抵いうノ假名。

リ

りふ
りゆう

立笠粒
龍隆(りゆうハりうト書クモ妨ナシ)

此ノ外ハ大抵りうノ假名。

れう
れふ
りよう

寮療遼燎僚瞭了料聊寥
獵鬣
凌菱稜陵綾龍

此ノ外ハ大抵りやうノ假名。

ロ

らふ
ろう

螺瞳朧
籠瓏朧瓏聾櫳籠樓僂螻
鏤弄陋漏

此ノ外ハ大抵らうノ假名。

ヰ

す・つ・ゆ・る等ノう列ノ音ノ下ニ來ルいノ發音ハゐノ假名デアル
水(すゐ)追(つゐ)隨(ずゐ)唯(ゆゐ)類(るゐ)等
此ノ外ハいノ假名
愛(あい)英(えい)明(めい)清(せい)等

大正十年七月廿一日印刷
大正十年十月廿四日發行
昭和四年二月十五日訂正六版印刷
昭和四年二月十八日訂正六版發行
昭和九年十一月三十日訂正七版印刷
昭和九年十二月三日訂正七版發行
昭和十年十月十日訂正八版印刷
昭和十年十月十六日訂正八版發行
昭和十二年七月廿三日訂正九版印刷
昭和十二年七月廿六日訂正九版發行
昭和十三年一月廿五日訂正十版印刷
昭和十三年一月廿九日訂正十版發行

不許複製

新制中等新國文 全十册
定價各册 金五十八錢

編纂者 故三矢重松
右相續者 三矢夏井
補訂者 鳥野幸次
補訂者 折口信夫

發行兼印刷者 東京市神田區美土代町十八番地 株式會社 文學社
電話神田三五一番
振替口座東京三八七八番

印刷所 東京市神田區美土代町十八番地 株式會社 文學社 代表者 小林竹雄
東京市本郷區真砂町三十六番地 日東印刷株式會社

關西一手販賣所 大阪市西區靱北通り二丁目 株式會社 盛文館
電話土佐堀一五二三番
振替貯金口座大阪七四三番

S. Enda

S. Enda